

ひろげる、たのしむ、  
小粋な日本画

近代画帖がじょうの美



# ひろげる、たのしむ、小粋な日本画

近代画帖がじょうの美

平成二十三年七月二十三日(土)～九月十一日(日)

前期…七月二十三日(土)～八月十四日(日)  
後期…八月十六日(火)～九月十一日(日)

宮内庁三の丸尚蔵館

## 目次

3	— ごあいさつ
4	— 近代の画帖 明治から昭和まで
7	— 図版・解説
22	— 〈コラム〉調度としての近代画帖
48	— 〈コラム〉瑞彩について—大正期を代表する画帖の名品—
61	— 出品目録
iii	— List of Exhibits
ii	— Foreword

## 凡例

- 一、本図録は、平成二十三年七月二十三日(土)から九月十一日(日)を会期とする展覧会「ひろげる、たのしむ、小粋な日 本画—近代画帖の美」の解説図録である。
- 一、図録に掲載する図版の番号(作品番号)は、展示番号と一致する。
- 一、会期中、展示替を行う。
- 一、作品解説に記載する寸法は、本紙は縦×横、総寸は縦(奥行)×横(幅)×高で表示している。単位はcmである。
- 一、本展覧会で展示する作品は、全て三の丸尚蔵館の所蔵品である。
- 一、本展覧会の企画および図録執筆は、三の丸尚蔵館学芸室研究員・斉藤全人が担当した。
- 一、本図録掲載作品の図版は、福島省、綿引雅俊(以上、株式会社インフォマーチュ)他が撮影した当館所蔵のフィルム、デジタル画像による。

## 〔謝辞〕

本展の開催準備にあたり、次の方に資料提供等の御協力を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

和田真理子(財団法人日本美術院) (敬称略)

## Copyright

©Katsura Kawabata & Minami Kawabata 2011/JA1100128

[cat. p.33, 37]

©Suzuhiko Kawasaki 2011/JA1100128 [cat. p.38]

## 「あいさつ」

画帖がじょうとは、一人、又は複数の画家の絵を台紙に貼り込み、一帖の折本に仕立てた絵画作品の一つの形式です。古くは、明時代の中国の影響を受けていろいろな渡来画を集めたり、『源氏物語』を題材にするなどして、鑑賞とともに調度として飾り置くことも目的とした美しい装丁を伴って画帖は制作されました。さらに江戸時代も後半になると、流派を越えた絵師や文化人の交流が盛んになる中で、画帖の内容は幅を広げて流行しました。

明治時代以降、画帖という形式は、画家たちの様々な絵を手頃な大きさにまとめられることから、国内外への贈進品として好まれ、各種の記念行事や祭典の折に、その慶祝の意を込めて制作されることが多くなりました。その後大正、昭和と時代が移り変わるに従って、画帖は次第に姿を消していきます。しかし、そうした中でも皇室の御慶事に際しては、各美術団体や自治体から数多くの画帖が献上されました。そうした理由から、当館には近代の画帖がまとまって収蔵されており、これが当館の近代日本画の一つの特色ともなっています。これらの画帖では、当時の画壇を代表する画家たちの贅沢ぜいたくな共演を楽しむことができます。とともにも、小画面であればこそその小粋で洒落しやれた感覚を味わうことができます。また趣向を凝らした飾り金具や美しい裂地きれじを用いた装丁も見所です。

今回の展覧会では、このように調度としての品格を備えながら、多彩な絵で見る者の目を楽しませてくれる画帖の魅力を紹介します。近代以降、皇室への献上を通じて描き継がれてきた画帖という形式を、改めて知っていただく機会となれば幸いです。

平成二十三年七月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第55回 ひろげる, たのしむ, 小粋な日本画-近代画帖の美)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	画帖	瀧和亭ほか四十八名の合作	一帖	明治18、19年 (1885、86)	p. 8-11
2	青年画帖	池田真哉ほか十九名の合作、上奏文：村田直景・関口隆正	一帖	明治27年 (1894)	p. 12-15
3	慶雲帖	山名貫義ほか六十名の合作、 [上]題字：伊藤圭介、序文：高田竹山 [下]題字：小野湖山、序文：高林五峰	二帖	明治33年 (1900)	p. 16-19
4	画帖	杉谷雪樵	一帖 (二帖のうち)	明治24年 (1891)	p. 20
5	日本美術協会画帖	川端玉章ほか十二名の合作	一帖 (二帖のうち)	明治33年 (1900)	p. 21
6	京都市画帖	鈴木松年ほか三十六名の合作	二帖	大正4年 (1915)	p. 24-28
7	景雲餘彩	横山大観ほか二十二名の合作	一帖	大正11年 (1922)	p. 29-33
8	瑞彩	富岡鉄斎ほか七十三名の合作、 題字：松方正義、跋文：宇佐美勝夫	三帖	大正13年 (1924)	p. 34-47
9	秋田名勝画帖	平福百穂	一帖	昭和3年 (1928)	p. 53-56
10	彩雲	奥村土牛ほか二十八名の合作	一帖	昭和56年 (1981)	p. 57-60

# 近代の画帖 明治から昭和まで

絵画作品の一つの形態に、画帖<sup>①</sup>という形がある。絵巻や屏風に比べて、あまり馴染みがない言葉であるが、画帖は折本仕立ての冊子の中に、複数の絵を貼り込んだアルバム形式の作品をいう。絵手鑑や画冊などと称されることもある。近世までの画帖については展覧会や美術書で幾度か紹介されているが<sup>②③</sup>、明治以降の近代の画帖を詳しく取り上げたものはほとんど見当たらない。それは、画帖の制作が江戸時代をピークに近代に入ってから減少し、また、まとまった量の画帖を収蔵している美術館等が少ないこと、そして近代の画帖が、近世までのものとは異なった価値観のものであったためであろう。

しかし、当館には明治、大正、昭和にかけて制作された鑑賞性の高い画帖が数多く収蔵されており、それが館蔵の近代日本画の一つの特色となっている。ここでは、皇室に近代の画帖が多く伝えられてきた背景に触れるとともに、本展の見所を紹介したい。



まずは、時代が明治に移る前の江戸時代後期、画帖がどのような機会に制作されていたのか、先行研究をもとに少し触れておきたい。この時期の作例には、田能村竹田「亦復一楽帖」(寧楽美術館蔵)や池大雅と与謝蕪村による「十便十宜帖」(川端康成記念館蔵)、または酒井抱一による「絵手鑑」(静嘉堂文库美術館蔵)など、画家が一人ないし二人で制作し、現在も名品として広く知られている作例がある。ただし、残された作品の数としては、十数名の画家が寄り集まって合作した画帖や、さらに多くの画家の絵を蒐集して一冊にまとめた画帖の数が断然多く、こうした画帖は主に寛政期(一七八九―一八〇四年)以降、十九世紀に制作されたという。その中で目立つのは、ある画家の古稀などを祝って親交のある画家たちが筆を寄せるなどした、年寿の祝いに制作された画帖である。揮毫に参加する画家の人数が多く、制作に時間と手間のかかる画帖は、このように何か祝い事などの特別な出来事の記念として作られることが多かったのである。その他、知人との送別、故人

の追薦、来訪者による揮毫、親しい交友関係などを機に制作された作例が紹介されている<sup>④⑤</sup>。

時代が明治に移って、そうした記念品としての画帖が、皇室から外国王室関係者へ贈られた。明治二年に、明治天皇からイギリス王子エディンバラ公へ画帖十帖、オーストリア・ハンガリー皇帝フランツ・ヨーゼフ二世に画帖二帖が贈られたのが、その大がかりな画帖制作の最も早い例だろう<sup>⑥⑦</sup>。これらは両国の友好のしるしとして贈られたものであり、明治新政府による初めての文化事業でもあった。そもそも、画帖は複数の画家の絵が持ち運びやすい大きさにまとめられており、それに加えて先述の通り、江戸時代から祝賀の意を込めて制作される機会も多かった。だからこそ、維新直後の外交上重要な贈進品としても選ばれたと考えられる。明治の初めにこうした形で画帖が制作、贈呈されたためか、それ以降も祝意を表す贈進品として画帖が用いられる例が続くこととなった。

画帖の贈進は国内外両方で行われた。当時の新聞や雑誌記事を追えば、例えば国内では明治二十三年に東洋絵画会が、同会名誉会員である渡辺洪基の特命全權大使としてのオーストリア赴任に際して「日本絵画の妙を欧州に発表せんと欲し」<sup>⑧</sup> 4 同会会員画家の合作による画帖を渡辺へ贈った。京都においても明治二十九年、平安遷都千百年記念祭を祝い、京都参事会より記念祭開催の中心人物であった佐野常民と九鬼隆一へ、岸竹堂、今尾景年ら十二名の画家による「京都四季名勝画帖」が贈呈された<sup>⑨</sup>。

同時期の国外への贈進例としては、明治二十五年に、東京市の麹町区からロシアのニコライ皇太子(後のニコライ二世)へ贈呈された、十二名の画家の絵と高崎正風の書をまとめた書画帖が挙げられる<sup>⑩</sup>。ニコライ皇太子は前年に来日し、麹町区でも奉迎行事を予定していたが、皇太子が大津事件に遭い、入京がはたされずに帰国したため、遺憾の念と変わらぬ敬愛の意を表して、同区では画帖を贈呈したのである。また大正十一年になると、来日した英国のエドワード皇太子(後のエ

ドワード八世)へ東京府より、歓迎の意を込めて画帖二帖が贈られた。この画帖は、皇太子が滞在中に訪れる日本各地の名勝を、東西両画壇の三十六名の画家が描いたものであった。

画帖の制作が一種の流行になった江戸時代後期に比べると、明治以降、個人の画家や文人が交友する画家らを集めて趣味的に画帖をする例は減少していった。しかし、ここで見たように、何らかの祝いや記念として画帖を制作するという行為は、個人的な交友関係を越えて、美術団体や公的機関などによる大規模な事業として着手されるという形で受け継がれていったのである。



近代において、祝賀という性格を江戸時代から受け継ぎ、また団体規模で作られるようになった画帖は、皇室の御慶事を祝う品として、折々に触れて献上されるようになっていった。当館に収蔵される近代の画帖の多くが、こうして献上されたものである。

皇室の御慶事に際し、初めて国を挙げて大々的な祝典を行った、明治二十七年の明治天皇昭憲皇太后の銀婚式では、日本青年絵画協会より「青年画帖」(作品番号2)が献上された。それ以降、明治三十三年の皇太子(大正天皇)御成婚では、東京在住の画家らの合作による「慶雲帖」(作品番号3)や日本美術協会会員らによる「日本美術協会画帖」(作品番号5)などが次々と献上された。

大正時代に入ると、さらに皇室の御慶事が相次ぎ、大正四年の大礼では京都市から「京都市画帖」(作品番号6)が献上されたのはじめ、他にも各団体から画帖が献上された。大正五年の立太子礼を祝って、同七年には全国の文官一同より「精華」と題された画帖三帖が、油彩の風景画七面とともに皇太子へ献上された。これは小堀鞆音や寺崎広業などの日本画家三十六名が国史を題材とした絵をまとめたものであったという。

そして大正十三年、前年の関東大震災のために延期されていた皇太子裕仁親王と久邇宮良子女王の御婚儀が挙行されたことをお祝いして、大正期の画帖の名品「瑞彩」(作品番号8)が東京府から献上された。この制作には東京美術学校校長正木直彦が大きく関わったことが知られており、東京だけでなく関西方面まで含めて、当時を代表する画壇の実力者たち計七十三名が筆を寄せている。また全三帖の画帖およびそれを納める収納箱の装丁も東京美術学校に依頼され、御慶事にふさわしい伝統と重厚な品に仕上げられた。

続く大正十四年の大正天皇貞明皇后大婚二十五年を奉祝して制作されたのが、文武官一同からの献上による飾棚と棚飾品の一式の中の、画帖四帖および画卷四

巻である。これもまた東京美術学校が制作に関わり、画帖に関しては「瑞彩」を超える、総勢百名の東西画壇の画家が揮毫に加わったことが知られる。翌年にはこの棚と棚飾品一式は完成したが、直後に大正天皇が崩御されたため、実際に貞明皇后に献上されたのは昭和四年三月のことであった。

時代が昭和に移っても、皇室への画帖の献上は続いた。昭和の大礼の奉祝品としても、各団体から画帖が献上されたが、中でも秋田市より献上された「秋田名勝画帖」(作品番号9)が目玉される。これは秋田出身の画家平福百穂の筆によるもので、現地の写生をもとに、百穂らしいおだやかな墨の調子によって秋田の各景勝が情緒豊かに描かれている。

昭和八年十二月の皇太子(天皇陛下)の御誕生を祝う献上品としては、日本美術院が昭和九年に献上した「旭光帖」(当館蔵)が挙げられる。二帖揃いのこの画帖には、横山大観を代表として日本美術院の同人画家二十八名が筆を寄せ、さらに院の彫刻部の同人十二名の手による、各種のレリーフを嵌め込んだ「春瑞額」(当館蔵)とともに献上された。日本美術院はその後日本美術を牽引する美術団体として活動を続け、昭和の終わりにも昭和天皇の傘寿を祝う「彩雲」(作品番号10)や、昭和天皇御在位六十年を祝う「光彩」(当館蔵)などの画帖を献上している。



明治から昭和にかけての御慶事における画帖の献上例を見てきたが、もちろん御慶事以外にも画帖は献上されている。

すでに明治十年代には、東洋絵画会による「画帖」(作品番号1)や、京都府画学校による「京都府画学校校員画帖」(当館蔵)など、詳細は残念ながら明らかにできていないが、御慶事ではなく、何らかの記念としての画帖献上の例がうかがえる。

また、大正二年に開催された第七回文部省美術展覧会には、大正天皇、貞明皇后の行幸啓がなされたが、文部省ではこれを記念して文展審査員および展覧会二等受賞の画家らに揮毫を依頼し、同三年に二帖の画帖(当館蔵)を献上した。そして、大正十一年に皇太子(昭和天皇)が第九回再興日本美術院展へ初めて行啓された時も、美術院より記念の画帖「景雲餘彩」(作品番号7)が献上された。美術院ではその前年より皇太子行啓を願い出ており、その念願かなった行啓は在野の美術団体であった同院にとって大変意義深いものであった。こうした行幸啓に対する記念として画帖が制作されたのも、皇室ならではの特徴と言えるだろう。

明治から昭和にかけて皇室へと献上された数々の画帖であるが、各時代の画帖にはそれぞれに着目すべき点がある。明治時代の画帖には、江戸時代後期に風雅

を樂しむ人々が趣味を同じくする仲間達と制作した画帖の、自由で洒脱な雰囲気の名残を感じることが出来る。また、今ではほとんど作品が残っていない画家の絵も多く含まれており、小品ながらその画風を知ることのできる貴重な作例でもある。

皇室の御慶事が続いた大正時代は、画帖の献上例もとりわけ多い。この時期は、画壇を代表する画家が絵を描くのはもちろんのこと、表紙の裂や金具など、装丁の細部まで著名な工芸作家が分担して制作するなど、日本美術各分野の粋を集めた豪華な画帖が制作されたのが、大きな特徴である。

その後昭和に入ると、徐々に画帖の献上例は少なくなっていくが、そうした中でも日本美術院が、御慶事の際の画帖の献上を現在まで存続している点は特筆すべきだろう。



最後にもう一つ、これもまた皇室へ献上された画帖の一つの特徴と言える、記念図録の制作について触れておきたい。画帖の献上は、その美術団体なり自治体にとつても記念すべき事業であったため、その記録を留めるために、また画帖制作に関わった人々へ配布するためにも、画帖の内容を印刷した記念図録が数百部ほど制作される例が少なくない。本展出品作で言えば、「京都市画帖」(「麒麟餘影」京都市役所、大正四年発行)、「景雲餘影」(日本美術院、大正十一年発行)、「瑞彩」(東京府、大正十三年発行)、「秋田名勝画帖」(「百穂遺芳」(秋田十二景)出版社、出版年不明)については、記念図録を制作したことが確認される。「京都市画帖」(「瑞彩」)の図録などは、表紙のデザインも画帖の表紙裂の文様に倣っている。

本展出品作の他にも、大正四年に大札を祝って教育通信社から献上された「書画帖」の記念図録である『奉獻記念書画帖』(教育通信社、大正五年発行)、大正十四年の大婚二十五年奉祝を祝って文武官一同から献上された画帖、画巻と飾棚の全容をまとめた『御成婚奉祝献品図録』(東京美術学校文庫、昭和四年発行)、そして昭和九年の皇太子御誕生を祝しての日本美術院による「旭光帖」と「春瑞額」の記念図録(日本美術院、出版年不明)などの存在が確認できる。こうした例がいつ頃から始まるのか正確なところは分からないが、明治三十三年に日本画会が皇太子御成婚を祝って画帖を献上した際にも、記念図録を作成し揮毫者や関係者へ頒布したと当時の雑誌記事にあることから(註7)、少なくとも明治の後半には始まり、大正以降は相当数制作されたものと思われる。

記念図録の中には、画帖の各図が印刷されているだけでなく、献上当時の画帖の姿(箱や包み裂を含む)が写真で掲載されていたり、または献上代表者による序文や各

図の画題が付記されていたりと、作品にとつての貴重な参考資料となるものが多い。皇室へ献上された画帖以外でこうした図録制作の例を探すと、大正十一年に東京府より英国皇太子へ贈られた画帖「東瀛芳躰」が該当するぐらいである。この画帖は「瑞彩」と同様に、東京美術学校が依頼制作したものであり、どちらの図録も画帖とともに同校が手がけた。当時の資料によると、「東瀛芳躰」は通常の複製本が三百冊あまり制作された他、装丁に凝った上製本が大正天皇、貞明皇后、皇太子、閑院宮載仁親王へそれぞれ献上されたという。



明治、大正、昭和と主に御慶事を祝って、皇室へ献上された数多くの画帖。これらの画帖ひとつひとつには、献上した人々の強い思いが込められている。

当館に収められた近代の画帖の中でも、大正期を代表する名品「瑞彩」の制作、献上は、東京府知事宇佐美勝夫が中心となって行った一大文化事業であった。自らこの画帖制作を計画した宇佐美は、大正十二年七月に画家たちに揮毫を依頼するため、候補者を上野の精養軒に集めた。その席で宇佐美は「画帖奉獻の趣意は御慶事をお祝ひ申上ぐると同時に、大正時代の日本美術を後世に残したいと云ふ希望からである」(註8)と熱く語り、画家たちの心を動かしたという。皇室へ作品を献上するという行為には、一帖の画帖に集約されたそれぞれの時代の日本美術の素晴らしさが、永く皇室によって守り伝えられて欲しいという願いが込められていたのである。そうした思いを込めて献上された画帖は、実際に皇室の中で大切に鑑賞され続け、今日まで伝わっている。

斉藤 全人(さいとう まひと)／当館学芸室研究員

(註1) 『江戸名作画帖全集一〇十』(小林忠・河野元昭監修、駈々堂出版、平成四〇九年)、「折り畳まれた美の世界―十九世紀の画帖」展(京都造形芸術大学芸術館、平成十年)、「古筆手鑑と画帖の名品 近世日本のアート・アルバム」展(サントリ美術館、平成十三年)など。

(註2) 武田光一「書画が菟まる／書画を蒐める―寄合・蒐書画帖について―」『江戸名作画帖全集十 寄合書画帖文人語家』駈々堂出版、平成九年

(註3) 塩谷純「ウィーン美術史美術館所蔵画帖」『美術研究』第三百七十九号、平成十五年

永島明子「オーストリアに伝わるミカドの贈り物―明治新政府の文化外交―」『THE

ハプスブルク』展覧会図録、国立新美術館・京都国立博物館、平成二十一年

(註4) 『絵画叢誌』四十二号、四十三号、明治二十三年九月、十月

(註5) 『絵画叢誌』百十一号、明治二十九年四月

(註6) 『読売新聞』明治二十五年五月十五日

(註7) 『絵画叢誌』百六十二号、明治三十三年七月

(註8) 『読売新聞』大正十二年七月十二日

# 図版・解説



## 1 画帖

一帖

瀧和亭ほか四十八名の合作  
明治十八、十九年（二八八五、八六）

絹本着色

本紙各三二・一×四一・六

総四一・三×五一・〇×六・五

本画帖は、付属の目録「画帖人名録」によると、狩野派、四条派、土佐派、南宗派、南北合派など様々な流派の画家四十八名が筆を寄せたものである。その内、少なくとも三十二名は東洋絵画会の当時の名簿にその名が見出せる画家であり、また画中の年記から明治十八年および十九年に制作されたものであることが分かる。東洋絵画会からは明治十九年に明治天皇、昭憲皇太后へそれぞれ一帖ずつ画帖が献上されたとの記録があり、本画帖はその一つである可能性が高い。

東洋絵画会とは、明治十五年、十七年に農商務省が開催した内国絵画共進会の後を継ぐ形で、同十七年に結成された美術団体である。民間組織ではあるが、会長に農商務大輔品川弥二郎を置いた半官半民の形をとっており、総裁には北白川宮能久親王を戴いていた。同会は東洋絵画共進会と題した展覧会を開催した他、機関誌『東洋絵画叢誌』（明治二十年に『絵画叢誌』と改題を発行した。そして『東洋絵画叢誌』は第一号から毎号明治天皇、昭憲皇太后へ献上されており、これに続く形で、本画帖も同会の活動を報告する意味で制作、献上されたのだろう。

表紙は宝尽くし文の金欄に、「畫帖」と墨書された題箋が貼られている。中を開けば、花鳥図、山水図、風俗画、歴史画、また古典を踏襲した大和絵など多様な絵が現れ、各画家が得意とする画題を自由に描いた様子がかがえる。本画帖は、江戸時代後期に盛んに開催された書画展観会などで、各流派の画家たちが筆を寄せて作った画帖の雰囲気の色濃く残した作品とも言える。



① 瀧和亭



⑦ 橋本雅邦



⑳ 渡辺小華



⑥ 荒木寛畝



② 前田貫業



⑨ 狩野晏川



⑧ 野口幽谷



⑭ 柴田是真



⑪ 佐竹永湖





④

③

②

①



2 青年画帖

一帖

池田真哉ほか十九名の合作、  
上奏文・村田直景・関口隆正  
明治二十七年(一八九四)  
絹本着色  
本紙各三五・二(三七・二)×三二・七  
総四七・八×四二・〇×九・八



②②

②①

②①

①⑨



⑧ 尾形月耕 高砂



⑤ 寺崎広業 平安長春

明治天皇、昭憲皇太后の大婚二十五年（銀婚式）を記念して、明治二十七年に日本青年絵画協会が献上した画帖である。

この大婚二十五年は、皇室の御慶事を祝うため国を挙げて大々的な祝典がなされた最初の機会であり、以後明治、大正、昭和を通じ、皇室御慶事に際しては祝典を行い、全国より様々なお祝いの品が寄せられることとなった。当時、わが国では馴染みのなかった銀婚式という風習を取り入れたこの祝典に際しては、数多くの銀製品が献上されたことも特徴である。その中で、本画帖も銀婚式を意識した装丁で、表紙には白地に題箋型の銀箔が貼られ、本紙を囲む縁もすべて銀地という、この祝典に相応しい仕立てとしている。

画帖を開けば、日本青年絵画協会の学術委員を務める村田直景と関口隆正による上奏文に始まり、続いて同会委員の画家十九名の絵が次々と展開し、最後に各図の画題と作者名を記した奥書で締めくくる構成となっている。日本青年絵画協会とは、日本美術協会の若手画家たちが独立して、明治二十四年九月に立ち上げた団体で、会頭に岡倉天心を据え、池田真哉、庄司竹真らを中心に青年絵画共進会と名付けた展覧会を開催した。本画帖には、その第一回（明治二十五年十月）と第二回（明治二十六年四月）の審査員、もしくは一、二等褒状を受賞した画家が主に筆を寄せている。また各図の画題は、「日月」「蓬萊」「二見浦」「鶴鶴」など、上奏文の漢詩に込められた吉祥的な語彙と通じて選ばれている。





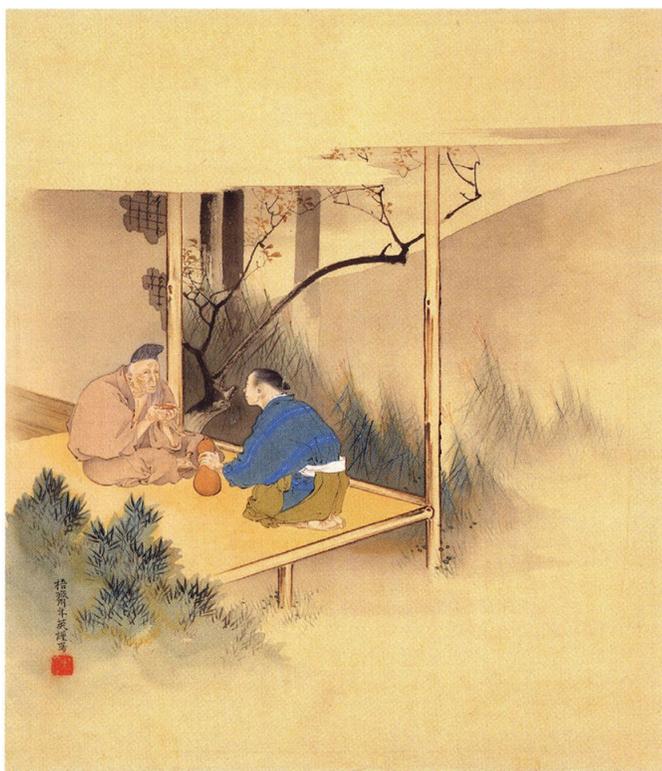
⑪ 山田敬中 久米舞



⑥ 庄司竹真 德若五万歳



⑭ 岡倉秋水 鶴鶴



⑬ 右田年英 養老



### 3 慶雲帖

二帖

山名貫義ほか六十名の合作、

〔上〕題字…伊藤圭介、序文…高田竹山

〔下〕題字…小野湖山、序文…高林五峰

明治三十三年（一九〇〇）

絹本着色

本紙各三九・二×三一・八

総各四二・五×三四・九×九・九

明治三十三年の皇太子（大正天皇）の御成婚奉祝の為に、東京市在住の士族清水信夫を総代として献上された画帖。

献上者の清水信夫（生没年不詳）とは、巴江の雅号を持ち、『明治文雅姓名録』（明治十二年）、『現今東京名家謎語画題』（明治十七年）、『雅風流』（明治二十八年）など、東京の書画家の名簿や臨画集を多く編纂した人物である。『明治文雅姓名録』中の自身の項では詩書を得意とすると記載している。本画帖は、そうした活動の中で親交のあった東京市在住の画家らが筆を寄せたものと思われ、上記の編纂本などで名前は確認できるものの、今ではその実作例がほとんど知られていない画家も多く含まれている。十九世紀前半に江戸の市中では、大小様々な書画展観会が開催され、画家、書家、文人らの交流が深まる中で、風雅な江戸文化が成熟していった。特定の美術団体の制作によるものではない本画帖は、そうした江戸の文人ネットワークが明治時代の東京にも存続していたことを示している。

一帖目のはじめは、理学博士伊藤圭介による「慶雲」の題字、二枚目に書家高田竹山の序文が続く。二帖目は、詩家小野湖山による「呈祥献瑞」の題字と書家高林五峰による序文から始まる。そして各帖とも三十名の画家が筆を寄せている。特定の団体や流派の集まりではないため、様々な画風が混在しているが、御慶事にふさわしい吉祥画題が多く目に付くのが特徴である。画帖の表紙も、亀甲に寿字を蝙蝠、巴文で囲んだ吉祥文様の裂に、松竹梅文様の飾り金具を四隅に附し、高林五峰の筆による「慶雲帖」という題箋が貼り付けられている。



上⑩ 梶田半古 松二鶏雌雄之図



上⑥ 斎藤南陵 若菜摘之図



上⑳ 西田春耕 群童游戲之図



上⑮ 水野年方 郭子儀



下⑭ 橋本周延 猿田彦命



下⑩ 富岡永洗 高砂尉姥



下⑳ 野口小蘋 寿山福海之図



下⑯ 田中光玉 鯉蛤之図



上④

上③

上②

上①



下④

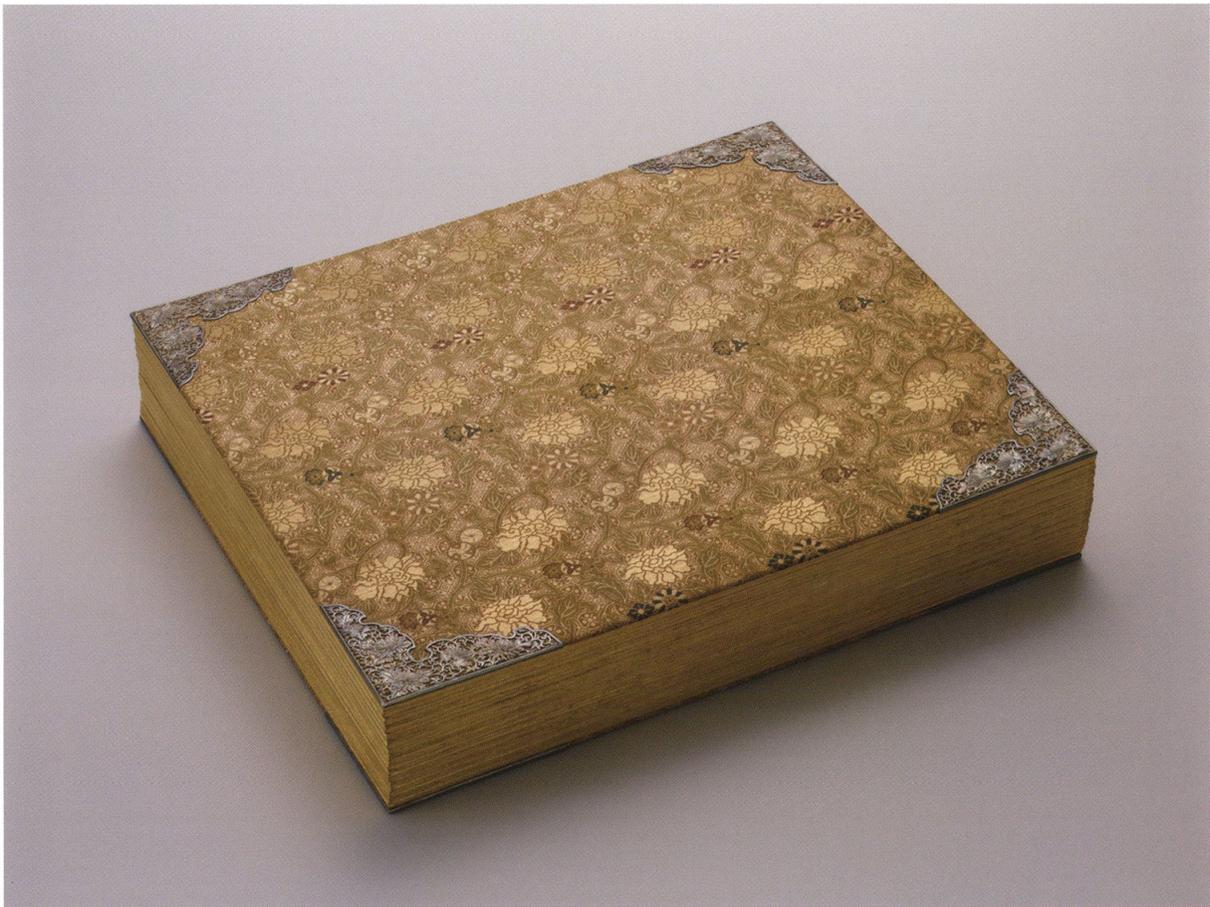
下③

下②

下①

「慶雲帖」作者・画題一覽

- |       |        |        |       |         |        |        |         |        |       |        |      |         |      |        |        |       |        |        |         |        |      |         |        |       |             |       |        |       |         |      |      |   |
|-------|--------|--------|-------|---------|--------|--------|---------|--------|-------|--------|------|---------|------|--------|--------|-------|--------|--------|---------|--------|------|---------|--------|-------|-------------|-------|--------|-------|---------|------|------|---|
| 32    | 31     | 30     | 29    | 28      | 27     | 26     | 25      | 24     | 23    | 22     | 21   | 20      | 19   | 18     | 17     | 16    | 15     | 14     | 13      | 12     | 11   | 10      | 9      | 8     | 7           | 6     | 5      | 4     | 3       | 2    | 1    | 上 |
| 鳴崎柳塢  | 阿出川真水  | 加藤雪窓   | 武村耕靄  | 中野鷗湖    | 西田春耕   | 大林香簷   | 熊谷直彦    | 久保田金仙  | 平林探溟  | 早川翠石   | 尾竹国観 | 高橋波香    | 松本洗耳 | 佐久間棲谷  | 藤嶋静村   | 野村文拳  | 水野年方   | 馬杉青琴   | 三嶋蕉窓    | 跡見玉枝   | 今村興宗 | 梶田半古    | 村岡桜塘   | 高橋松亭  | 大野樵蘭        | 斎藤南陵  | 古澤雪田   | 中林清淑  | 英一蜻     | 高田竹山 | 伊藤圭介 | 上 |
| 神代人物  | 不老長春之図 | 虞舜弹琴之図 | 蝶百合之図 | 可美真手命   | 群童游戲之図 | 金衣百子之図 | 松島之真景   | 丹鳳朝陽之図 | 武内大臣  | 松鶴遐齡之図 | 佐々礼石 | 西王母     | 養蚕之図 | 長春富貴之図 | 藤花游鯉之図 | 嵐山之真景 | 郭子儀    | 松林旭日之図 | 桜花之図    | 浪暖桃香之図 | 羽衣   | 松二鶏雌雄之図 | 舞榭翁之図  | 宝船    | 松二鷹         | 若菜摘之図 | 一品當朝之図 | 松竹梅山水 | 万歳之図    | 序文   | 題字   |   |
| 32    | 31     | 30     | 29    | 28      | 27     | 26     | 25      | 24     | 23    | 22     | 21   | 20      | 19   | 18     | 17     | 16    | 15     | 14     | 13      | 12     | 11   | 10      | 9      | 8     | 7           | 6     | 5      | 4     | 3       | 2    | 1    | 下 |
| 橋本雅邦  | 玉置環斎   | 小林永興   | 鏑木清方  | 池田有真    | 荒木寛畝   | 松本楓湖   | 小堀鞆音    | 鈴木華邨   | 池田輝方  | 野口小蘋   | 川端玉章 | 坂卷耕漁    | 高橋広湖 | 瀧和亭    | 名和永年   | 田中光玉  | 大倉耕濤   | 橋本周延   | 尾形月耕    | 寺崎広業   | 尾竹竹坡 | 富岡永洗    | 石川鴻斎   | 村瀬玉田  | 加藤樵舟        | 莊司竹真  | 黒澤墨山   | 山口江月  | 山名貫義    | 高林五峰 | 小野湖山 | 下 |
| 巖竹二靈芝 | 歳寒三友之図 | 鹿二牧童之図 | 福依女   | 徳若御万歳之図 | 菊花     | 養老孝子之図 | 舞榭蘭陵王之図 | 群鳩之図   | 山蔭中納言 | 寿山福海之図 | 宮島真景 | 謡曲鷺白式之図 | 耕作之図 | 富嶽之図   | 百事如意之図 | 鯉蛤之図  | 宝玉宝剑之図 | 猿田彦命   | 小金井観桜之図 | 古松二旭日  | 御代   | 高砂尉姥    | 天保九如之図 | 巖上二鶴鶴 | 尾張連浜主長寿舞榭之図 | 蓬萊山   | 蓬萊宮之図  | 小松引   | 二夕見ヶ浦之景 | 献呈辞  | 題字   |   |



(参考) 鸚鵡石榴図

4 画帖

一帖(二帖のうち)

杉谷雪樵筆

明治二十四年(二八九二)

絹本着色

本紙各四〇・九×五〇・六

総四七・八×五七・五×一一・〇

(詳しくは22〜23頁のコラム参照)



5 日本美術協会画帖

一帖(二帖のうち)

川端玉章ほか十二名の合作  
 明治三十三年(一九〇〇)  
 絹本着色

本紙各三一・八×四一・二  
 総三九・三×四八・四×八・四  
 (詳しくは22、23頁のコラム参照)



(参考)  
 川端玉章  
 一月 朝天高唱



(参考)  
 野口小蘋  
 十二月 豊年献瑞

# 調度としての近代画帖

## 1、近代以前の画帖

日本における画帖の初期の例としてよく紹介されるのが、室町時代に成立した『君台観左右帳記』の一文だろう。座敷飾りの方法を記した中に「画藁と云て、名筆の絵ともをあつめて、さうしにして金欄にて表紙をして、ちかひ欄ををかれ候」とある。「画藁」とは、「藁」が下書きを意味することから、絵手本のような意味合いと考えられる。文章の内容から、これは唐絵を集めて帖仕立てにしたものと推測され、ここに画帖の原型を見出すことができる。この一文で興味深いのは、この画帖が表紙の裂に金欄を用いており、調度として違い欄に置くように記されている点である。「名筆の絵」とは渡来した中国絵画、唐絵を指すと考えられ、この画帖は、当時大変な価値が付与されていた唐絵を貼り込み、さらにその表紙にも貴重な渡来の金欄を用いた、高尚なものであったことが分かる。その画帖は、貼り込まれた絵を鑑賞すると同時に、欄に飾り置き、姿も含めて鑑賞するものであった。

その後、土佐派の絵師らを中心に『源氏物語』や『伊勢物語』を題材とした画帖が登場する。これらは表紙を愛らしい裂などで飾って、大名などの婚礼調度の一つともなり、一方で盛んに制作された手鑑の姿とも影響しあって、装丁に工夫が凝らされるようにもなった。そして江戸時代中頃以降には、文人画家の間で画帖の制作が盛んに行われるようになる。これには、その頃日本に多く輸入された中国画(主に画譜や版本)の影響が考えられるが、文人画家らは互いに交流する中で興に乗じて筆をとり、その画や詩を帖に仕立てた。題

字や序文、奥書を付した画帖が目立つのも一つの特徴である。さらに江戸時代後期の十九世紀にもなると、画帖はより広く制作、鑑賞されるようになっていく。これは京都でも江戸でも書画会のように各流派の絵師や書家らが交流する場が増え、そうした中で自由に筆を寄せた寄合書きの画帖が多く制作されたためだろう。またそれに感化された数寄者らが、自ら蒐集した絵を画帖に仕立てたり、あらかじめ帖を作っておいて絵師や書家を訪ね歩いて揮毫を求めるなどしたという。当然そうした画帖の多くには豪華な装飾はなく、簡素な折本や冊子仕立てにしたものが多かった。

## 2、近代の画帖の装丁

それでは近代において、皇室へ献上された画帖はどのような流れをどこまで受け継ぎ、どのような装丁となったのか。

杉谷雪樵(一八二七〜九五)によって明治二十四年に制作された「画帖」(作品番号4)は、二帖揃いで各帖二十五図ずつが納められた作品である。雲合派の流れをくむ雪樵特有の、打ち込みが強く勢いある筆致と明快な彩色で、花鳥、山水、故事人物など多彩なモチーフが描かれている。この画帖の装丁に注目すると、その表紙には、当時流行した蜀江文風の模様を地に牡丹唐草を表した金欄が用いられ、四隅には、精緻な透かし彫りで八重菊を表した銀製の飾り金具が取り付けられている。また表紙だけでなく、本紙を囲む地の部分は、外枠を金箔で縁取り、その内側も金砂子を蒔いた円形

文様で装飾している。その装丁は総じて作品の格の高さを示していると言えよう。

そしてこの画帖には、雪樵と同郷の寺島蘭癡という人物の記した目録が付属する。この目録には各図の画題とともに、その画題の意味、モチーフとした花鳥の古来の呼称や言い伝えなどが詳細に記されている。この画帖を鑑賞する時の手引きとなるよう意図されたものであることが分かる。

次に、明治三十三年の皇太子御成婚を祝して、日本美術協会から献上された「日本美術協会画帖」(作品番号5)は、上下二帖仕立ての画帖で、各帖十二名ずつ同会員の画家が筆を寄せ、それぞれの絵は、御成婚にちなんで、つがい、もしくはその子供を加えた仲睦まじい禽鳥などが描かれている。表紙には、御成婚を祝うにふさわしく勢いよく波間に跳ねる魚を織り表した裂が用いられているが、その裂の文様は「荒磯緞子」と呼ばれる名物裂の文様をアレンジしたものである。そして四隅を飾るのが、菊花文様を透かし彫りにした銀製金具である。表紙の中央には、伝統的な吉祥図様である松喰鶴を金泥で描いた題箋が貼り付けられている。そして、周囲を総金地とした各画家の絵は、見開きの左頁に貼り込まれ、右頁には金砂子を蒔いた料紙が貼られている。

上下二帖揃いのこの画帖は、献上時には上下冊それぞれに目録が付していたと思われるが、現在は上冊の目録のみが伝わっている。それによると、上冊の画題は次の通りである。一月 朝天高唱(川端玉章) / 二月 玉洞報喜(益頭峻南) / 三月 桃花小禽(望月金鳳) / 四月 堂上雙白(原丹橋) / 五月 清風高節(荒木寛

友)／六月 百合雙雀(高橋玉淵)／七月 野草喜鵲(佐竹永陵)／八月 豊年穰々(松野霞城)／九月 菊花相思(山名義海)／十月 東籬佳色(武村耕露)／十一月 不老長春(佐久間鉄園)／十二月 豊年献瑞(野口小蘋)。このように一月から十二月までをテーマにして、それぞれに吉祥性を込めた画題が付けられており、画帖全体で慶祝の念が表現された作品と言えよう。

ここで取り上げた画帖を含め、明治期以降皇室へ献上された数多くの画帖は、吉祥文様や名物裂に倣った文様や織物を表紙に用い、装飾的な金具を取り付けるという特徴が指摘できる。また見返しや本紙を囲む地の部分にも、趣向が凝らされていることが多く、優美さと品格を備えた装丁となっているのである。このように、画帖本来の調度としての美しさは、近代に皇室へ献上された画帖において、しっかりと受け継がれていたのである。

### 3、 棚飾品についての画帖

そしてもうひとつ、調度としての画帖という意味で注目されるのが、飾棚と棚飾品一式の制作である<sup>註</sup>。棚とその棚に飾る調度を合わせて制作する例は、江戸時代の大名の婚礼調度にすでに認められるが、ここで、近代以降皇室への献上品の作例について触れておきたい。

明治四十年には、帝室技芸員合作となった「桑木地飾棚」と棚飾品一式当館蔵が華族一同より献上された(挿図)。この棚飾品の一つが、荒木寛敏や野口小蘋ら八名の画家による「古今集歌絵画帖」である。二代川島甚兵衛による綴錦で表紙と帙が仕立てられたこの画帖は、華美に走らず落ち着いた装丁となっており、伊藤平左衛門による桑木地の飾棚との取り合わせが意識さ

れていることが分かる。

さらに、大正十三年の皇太子(昭和天皇)御成婚を祝って、文武官一同から飾棚二基と棚飾品の献上品が計画された。大正十二年七月に内閣書記官長から各省次官宛てに送られた『皇太子殿下御成婚二付奉呈スル献上品一関スル報告』(国立公文書館蔵)によると、時絵の書棚を献上することが決定したが、予算に余裕がある時は、硯箱、画帖等を添えると記されている。この書棚を飾る調度として画帖が候補に挙げられていたことが分かる。ただし、それから実に五年の歳月がかかって完成した棚飾品をみると、昭和天皇へ献上された鳳凰菊時絵螺鈿飾棚<sup>註</sup>には初代龍村平蔵による「錦綾帖」が、香淳皇后への「鶴桐時絵螺鈿飾棚」には松岡映丘らによる「現代風俗絵巻」が棚飾品に加えられており、画帖は制作されていない。先の資料から考えれば、棚を飾るものとしてまず画帖が考案されていたが、それから計画が進むうち、二基の飾棚の雰囲気や全体のバランスを考慮して、上記のような作品に変更されたのだらう。

つづく大正十四年にも、大正天皇、貞明皇后の大婚二十五年を祝って、文武官一同から画帖四帖と画巻四巻、そして一对の飾棚とその他棚飾品の献上が計画された。この献上品の全容をまとめた『大婚二十五年奉祝献品図録』(東京美術学校文庫、昭和四年)の序文には、「以上の巻冊(画巻、画帖)を荘置せんか為に御飾棚二基を作り尚巻冊に添ふに置物文房具を以てしたり」とあり、まさに画帖と画巻を飾り置くために飾棚が制作されたことがわかる。四巻の画帖制作には、のべ百人の画家が加わるという大規模なものであった。

これらの飾棚と棚飾品に共通するのが、どれも制作に東京美術学校が深く関わっている点である。明治四十年の「桑木地飾棚」は、岸光景とともに同校教授島田佳矣が意匠考案を担当しており、大正十三年皇太子御成婚奉祝の飾棚も、同校長正木直彦が制作の指揮

をとり、島田が棚の意匠などを考案した。大正天皇大婚二十五年奉祝の飾棚もまた、東京美術学校の依頼制作によるものであり、同校教授渡辺香涯が図案設計を担当したと考えられる。島田や渡辺(または正木直彦校長)など依頼制作を担当した者たちは、調度としての画帖の伝統性を尊重しながら現在の技術を注いで、皇室にふさわしい飾棚と棚飾品を制作しよう意図したのである。こうして制作された棚飾品としての画帖は、飾り置かれる棚の意匠や装飾性との調和がはかられた装丁に仕立てられたのである。

大正十三年に御成婚奉祝品として東京府が献上した「瑞彩」もまた、東京美術学校が制作に関わった作品で、この画帖を納める三段棚の収納箱が書架として鑑賞できるよう設計されたところにも、やはり画帖を調度の一つとしてとらえる意識が認められるのである(48頁参照)。

(註)

ここで取り上げる飾棚と棚飾品については、以下の当館蔵覧会図録でも紹介している。「宮中の調度―棚と棚飾り」平成十三年、「祝美―大正期皇室御慶事の品々」平成十九年、「帝室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会」平成二十年。



帝室技芸員合作「桑木地飾棚および棚飾品」



## 6 京都市画帖

二帖

鈴木松年ほか三十六名の合作  
大正四年（一九一五）

絹本着色

本紙各三二・五×四一・四

総各四〇・九×五〇・二×一〇・七

大正天皇の大礼奉祝の為、大正四年に京都市から献上された画帖である。本画帖の表紙の題箋には砂子で金雲があしらわれ、献上にふさわしく菊文様の透かし彫り金具が四隅を飾る。表紙裏は白地菊花立涌文に尾長鳥と蝶が舞い飛ぶ華やかな文様である。各帖に十八図ずつ絵が貼り込まれている。

揮毫する画家には、京都在住画家の中から帝室技芸員、文展審査員、文展三等以上の入賞歴のある画家、そして老画伯の三十六名が選出された（『美術之日本』七卷九号、大正四年九月、『美術週報』七十九号、大正四年九月）。鈴木松年、原在泉、富岡鉄斎、今尾景年、巨勢小石といった維新前から京都で活躍した大家が落ち着いた筆遣いをみせる一方で、竹内栖鳳、菊池芳文、山元春挙ら次世代の画家や、さらにその栖鳳らに学んだ西村五雲、土田麦僊、榊原紫峰といった画家たちの絵には、モチーフの単純化、色彩の明快なコントラスト、顔料を厚く塗り込めて材質感を強調するなど挑戦的な試みが認められる。このように本画帖は、伝統と革新の入り交じった当時の京都画壇の様子をうかがうことができる興味深い作品と言えよう。また大堰川、稲荷山、音羽山など京都の名勝や、大原女など京都らしい題材が多く選ばれているのも、一つの特徴である。

この時、京都市からは画帖とともに、神坂雪佳の考案による御冠棚、御文台視箱、賀表箱や、京都市立陶磁器試験場による花瓶（青磁鳳凰耳花瓶〔当館蔵〕、香炉、そして飯田新七製作の錦織物が献上された。また京都市は献上後、『獻芹餘影』という題名をつけて本画帖の記念図録を発行している。



上⑤ 竹内栖鳳 波に鶴



上⑥ 原在泉 大堰川三船御遊



上⑰ 富岡鉄斎 天露湿裳

下⑰ 榊原紫峰 叭々鳥



上① 鈴木松年 昇旭老松

上③ 星野空外 春日森



上⑩ 上村松園 母子



上⑧ 土田麦僊 大原女



下⑤ 玉舎春輝 菊使



下① 都路華香 神路山



下⑯ 西山翠嶂 花売女



下⑭ 村上華岳 耕作

- 上
- ① 鈴木松年 昇旭老松
  - ② 西村五雲 麗かな日
  - ③ 星野空外 春日森
  - ④ 池田桂仙 天長地久
  - ⑤ 竹内栖鳳 波に鶴
  - ⑥ 原在泉 大堰川三船御遊
  - ⑦ 菊池契月 翠松
  - ⑧ 土田麦僊 大原女
  - ⑨ 田近竹邨 天長地久
  - ⑩ 上村松園 母子
  - ⑪ 徳田隣斎 稲荷山
  - ⑫ 庄田鶴友 如意嶽の曙光
  - ⑬ 匹田芳沼 小春
  - ⑭ 橋本関雪 富嶽
  - ⑮ 川村曼舟 天高気澄
  - ⑯ 山下竹斎 時雨
  - ⑰ 富岡鉄斎 天露湿裳
  - ⑱ 菊池芳文 雪松水禽

- 下
- ① 都路華香 神路山
  - ② 山田耕雲 牡丹
  - ③ 今尾景年 千歳松
  - ④ 木島桜谷 富嶽
  - ⑤ 玉舎春輝 菊使
  - ⑥ 阿部春峰 双鶴
  - ⑦ 川北霞峰 皐月の頃
  - ⑧ 八田高容 夏の川
  - ⑨ 山元春拳 萬代不易
  - ⑩ 山内信一 鳳凰
  - ⑪ 巨勢小石 富嶽
  - ⑫ 小村大雲 兔
  - ⑬ 平井樸仙 音羽山の秋色
  - ⑭ 村上華岳 耕作
  - ⑮ 服部春陽 蓬萊仙境
  - ⑯ 西山翠嶂 花売女
  - ⑰ 榊原紫峰 吠々鳥
  - ⑱ 上田萬秋 耀く野辺

「京都市画帖」作者・画題一覽



## 7 景雲餘彩

一帖

横山大観ほか二十二名の合作  
大正十一年（一九二二）

絹本着色

本紙各三二・〇×三九・〇

総三六・一×四三・一×二二・〇

本画帖は、大正十一年の第九回再興院展へ初めて皇太子・昭和天皇が行啓されたことを記念し、日本美術院が制作、献上したものである。画帖は巻頭の二面に横山大観が「景雲」「餘彩」の題字を記し、それに続けて大観を含め、下村観山、前田青邨、小林古径、速水御舟、安田靉彦といった院を代表する画家たち二十二名が、小画面にふさわしい洒脱で趣のある絵を描いている。巻末には、やはり大観が題字と同様の金泥を薄く刷いた地に奥書を記している。画帖の表紙は、萌葱地に瑞花瑞鳥を表した金襴の中央に、大観の筆で「景雲餘彩」と墨書された金地の題箋が貼られる。

日本美術院は、明治三十一年に東京美術学校を辞職した岡倉天心が中心となって設立した美術団体である。同三十九年には茨城県五浦に移転し、その後解散状態になるが、天心の死を契機に、大観、観山が文展へ対抗する在野団体という性格を強めて大正三年に再興させた。同院は、皇太子の展覧会への行啓を切望し、大正十年の第八回院展の時には東宮大夫へ行啓を願い出た。これは皇太子が欧州ご訪問からの帰朝直後で多忙を極めていたため叶わなかった。しかし翌年の日本美術院創立二十五周年を記念して行われた第九回展に際しては、あらためて東宮御所に公式の願書と共に記念の画帖を献上したい旨を申し入れた。この願いが認められ、ついに大正十一年九月、皇太子の行啓が実現したのである。行啓当日に展覧会会場で画帖は献上され、「ただちに一葉ずつ繰りひろげて御覧遊ばされ、御満足に思召さるる旨の御沙汰あり、御嘉納遊ばされた」（斎藤隆三「日本美術院史」、中央公論美術出版、昭和四十九年）という。

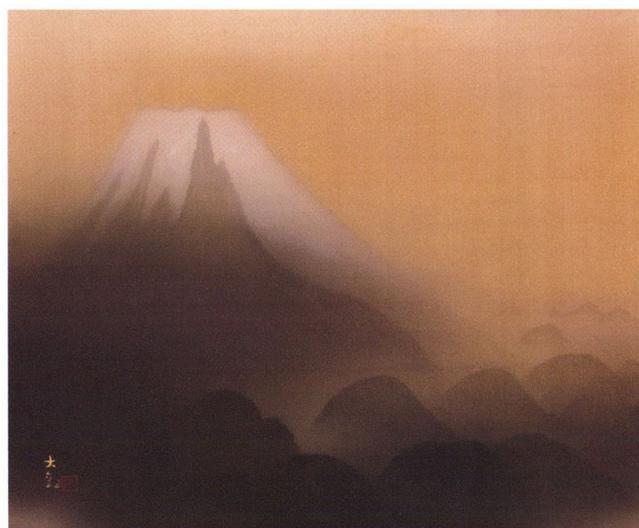
画帖には画題と作者を記した目録が付属していたと想定されるが、現在これは失われているため、当館では同院が献上を記念して作製した同名の図録によって画題を記している。



② 横山大観 題字



① 横山大観 題字



③ 横山大観 霊峰



⑥ 山村耕花 生果



⑤ 荒井寛方 鳩



⑧ 小林古径 栗鼠



⑦ 近藤浩一路 松島



⑩ 小茂田青樹 山村秋色



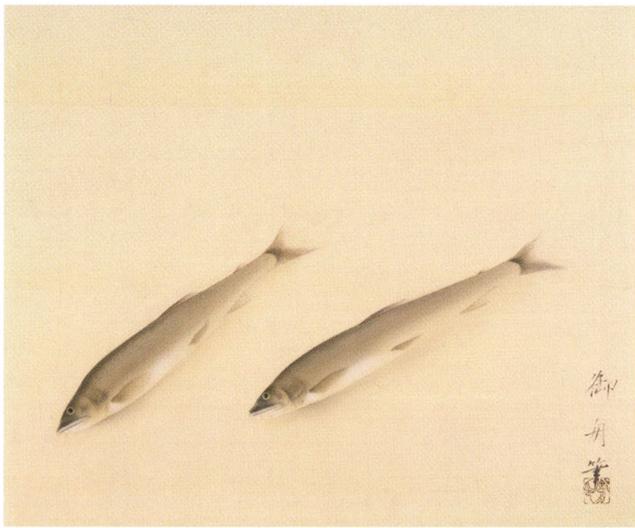
⑨ 富田溪仙 小原女



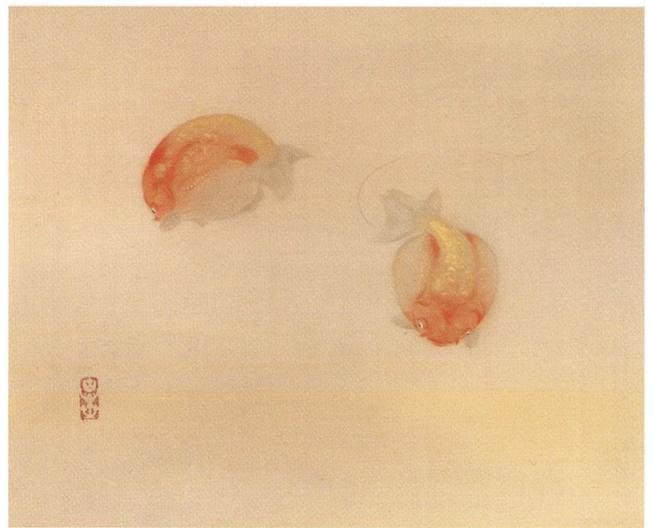
⑫ 木村武山 養老



⑪ 橋本静水 芙蓉



⑭ 速水御舟 香魚



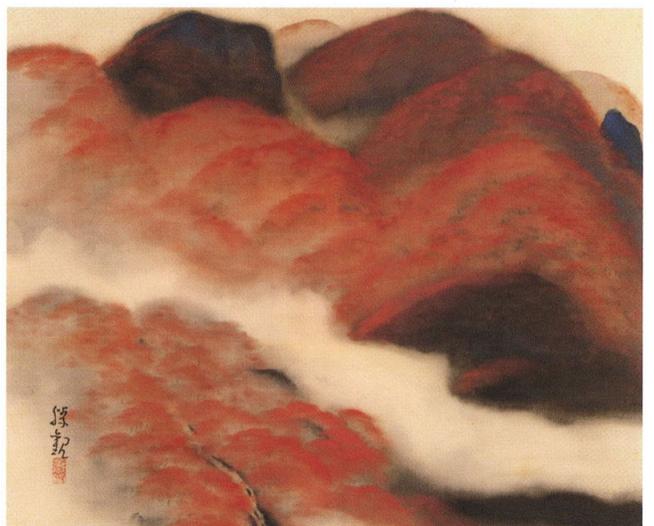
⑬ 橋本永邦 蘭鯉



⑯ 北野恒富 椿



⑮ 小川芋銭 細鰻漁



⑰ 大智勝観 満山紅葉

⑱ 真道黎明 葡萄

⑳ 中村岳陵 鯉



㉒ 川端龍子 いちぢく



㉔ 下村観山 残雪

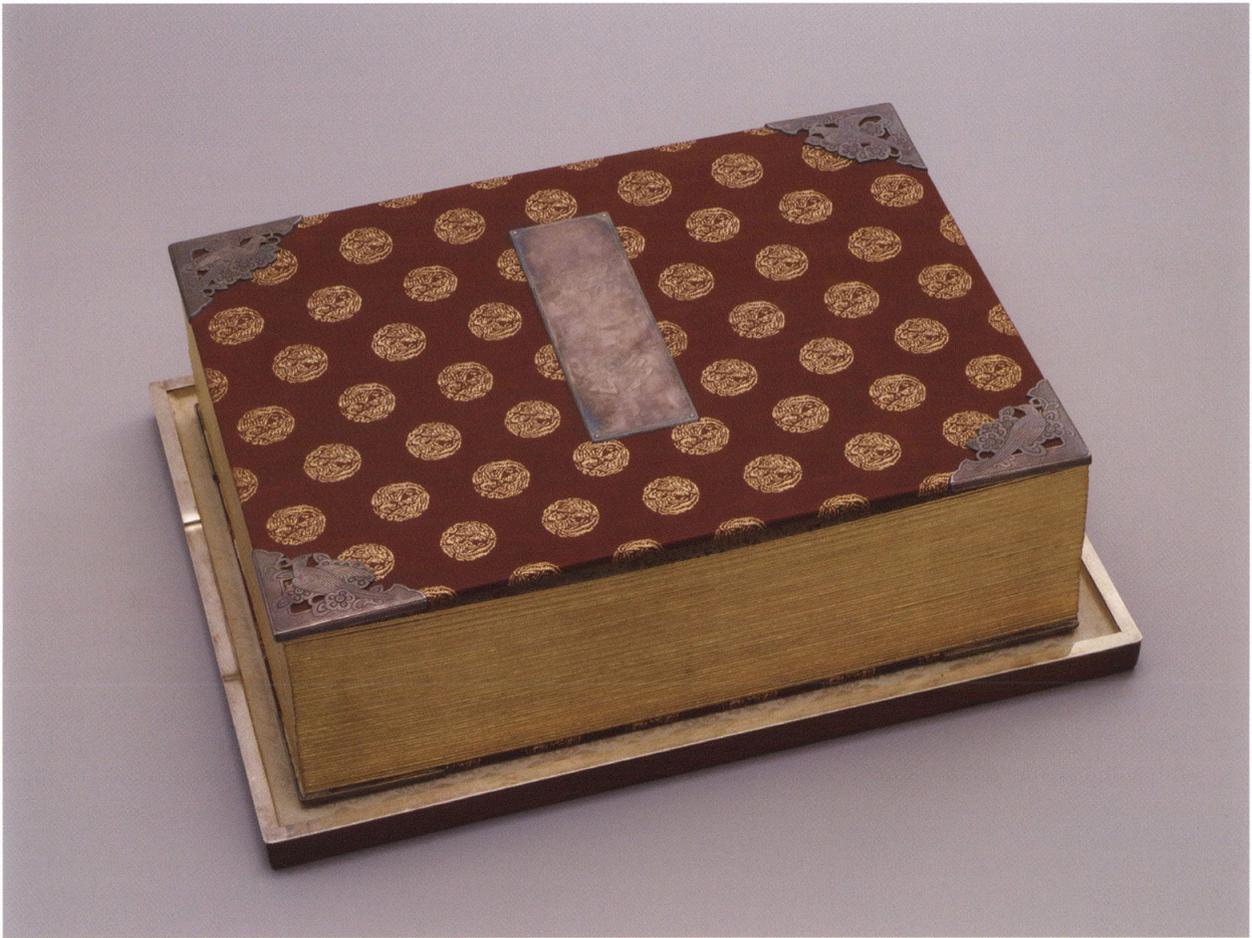
㉑ 安田靉彦 良寛



㉑ 筆谷等観 晩帰



㉓ 長野草風 ジャンク



## 8 瑞彩

三帖

富岡鉄斎ほか七十三名の合作、題字・松方正義、跋文・宇佐美勝夫  
大正十三年（一九二四）

絹本着色

本紙各二八・二×四〇・六

総各三四・七×四七・三×一四・五

大正十三年（一九二四）に皇太子裕仁親王（昭和天皇）と久邇宮良子女王（香淳皇后）の御成婚を祝って東京府から献上された画帖である。上中下冊の三帖仕立てで、各帖二十五面ずつが貼り込まれる。東西両画壇を代表する総勢七十三名の画家が筆を寄せた大作であり、上冊冒頭には松方正義公爵による題字、下冊末尾には宇佐美勝夫府知事によって奥書が記されている。

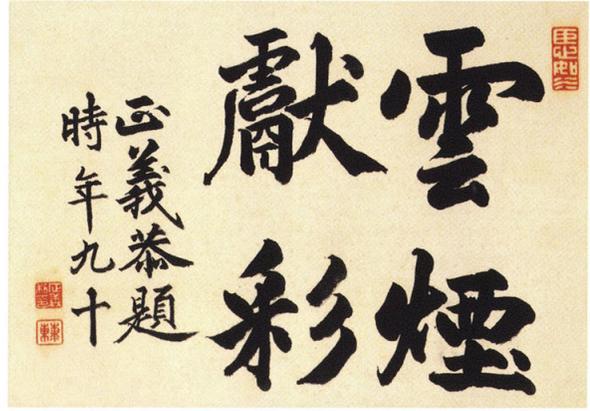
また本画帖の制作には構想段階から東京美術学校校長正木直彦（二八六二～一九四〇）が深く関わり、画帖の装丁や画帖を納める容器は、東京美術学校の依頼製作によるものである。画帖、収納箱とも同校教授渡辺香涯（一八七四～一九六二）によって伝統と格式を尊重した意匠にまとめられていた。制作の経緯や画帖および収納箱の意匠等については、48頁からのコラムにその詳細を紹介している。画帖には、正木の筆によって揮毫した画家とその画題が記された目録が付属する。



付属の目録



③ 今尾景年 梅花鴛鴦



① 松方正義 題字



② 富岡鉄斎 磯馭廬島



⑤ 池上秀畝 孔雀



④ 磯田長秋 業平逍遥住吉浜園



⑦ 石井林響 白鷗



⑥ 池田桂僊 蓬瀛瑞色



⑨ 速水御舟 生果



⑧ 石崎光瑤 雪山の石楠花



⑪ 橋本永邦 耕作



⑩ 橋本関雪 仙家献寿



⑬ 西村五雲 春の香



⑫ 橋本静水 鯉魚



⑭ 西山翠嶂 白鷹



⑮ 堂本印象 耕作

⑰ 小川芋銭 秋収



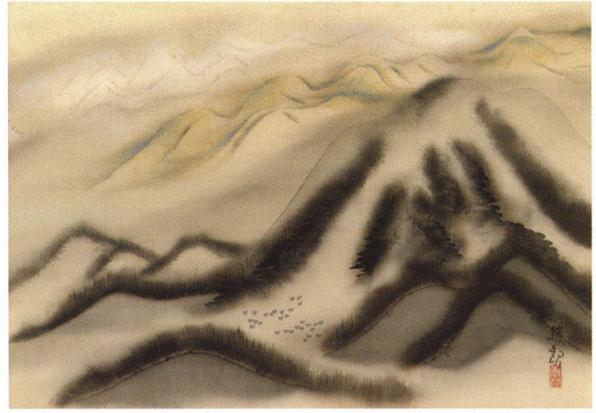
⑯ 富田溪仙 春日の神楽



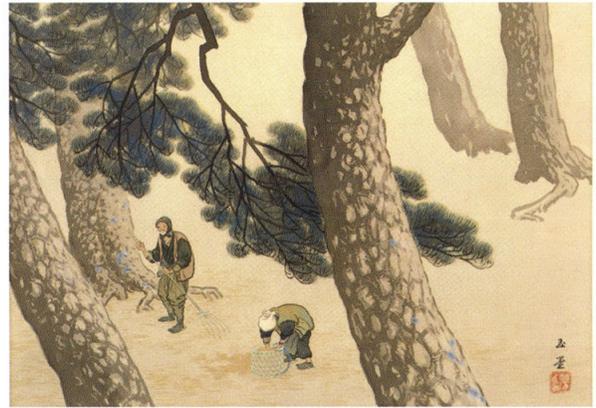
⑰ 川端龍子 御盃



⑳ 川村曼舟 湘南の風光

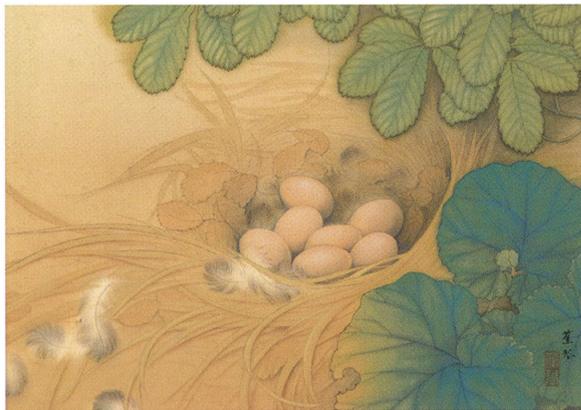


⑱ 大智勝観 暁雪

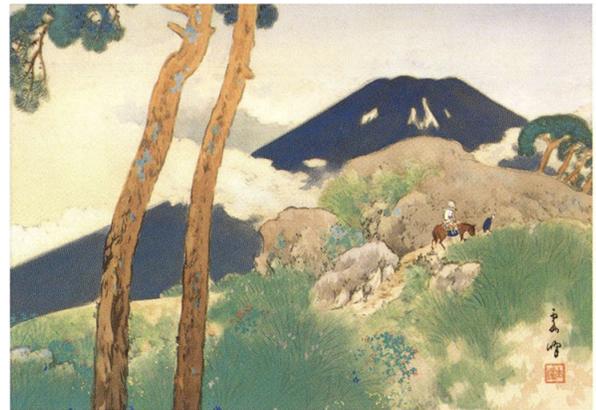


㉑ 川合玉堂 時津風

㉒ 川崎小虎 虫狩



㉔ 勝田蕉琴 新生



㉓ 川北霞峰 富士

㉕ 鏑木清方 明鏡



② 吉田秋光 鳳仙花



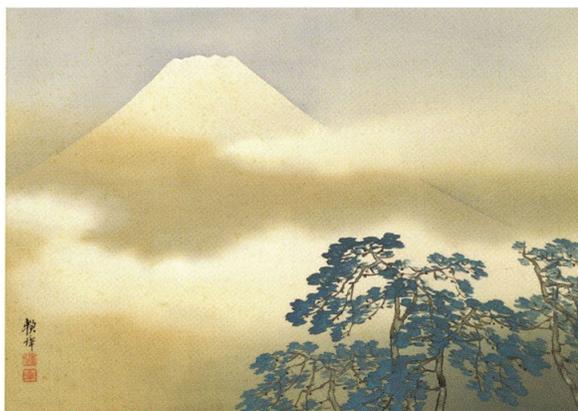
① 横山大観 靈峰



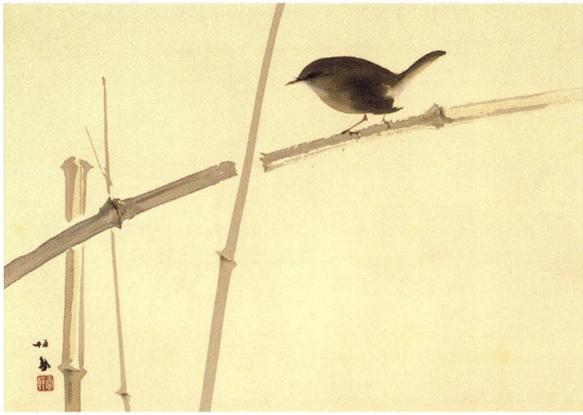
③ 吉村忠夫 春光



⑤ 高取稚成 蟹



④ 田中頼璋 東海大観



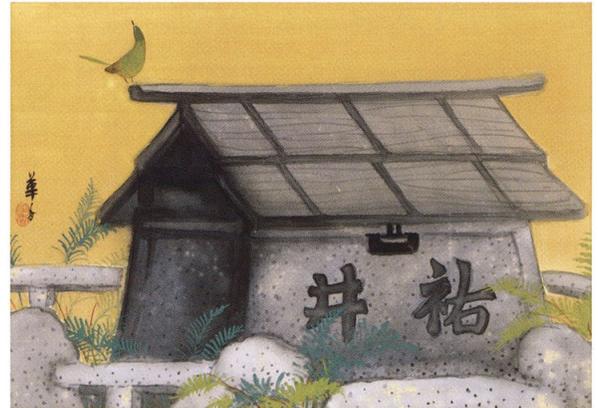
⑦ 竹内栖鳳 春



⑥ 高島北海 七草



⑨ 土田麦僊 大原女



⑧ 都路華香 祐井



⑫ 中村大三郎 薰香



⑩ 葛谷龍岬 三笠月

⑪ 中村岳陵 御吉兆



⑭ 上村松園 雛祭



⑬ 長野草風 秋の野



⑯ 矢澤弦月 春の海

⑮ 野田九浦 高千穂



⑱ 山村耕花 かほり



⑰ 山田敬中 富岳



①⑨ 山内多門 静海旭日



②① 山元春拳 瑞香满瓶

②⑩ 山下竹斎 慶雲昌光

②② 安田靱彦 春光



②④ 松岡映丘 鷹



②③ 松林桂月 東籬佳色

②⑤ 前田青邨 沙魚



① 小堀鞆音 窠前歌舞図



③ 筆谷等観 太宰府の月

② 福田平八郎 雛鶴



⑤ 小室翠雲 群僊供寿



④ 小林古径 菊花



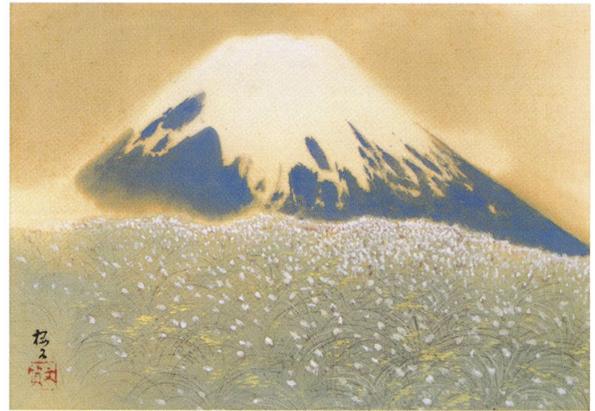
⑦ 小茂田青樹 母子の雀



⑥ 小村大雲 上古武人の遊猟



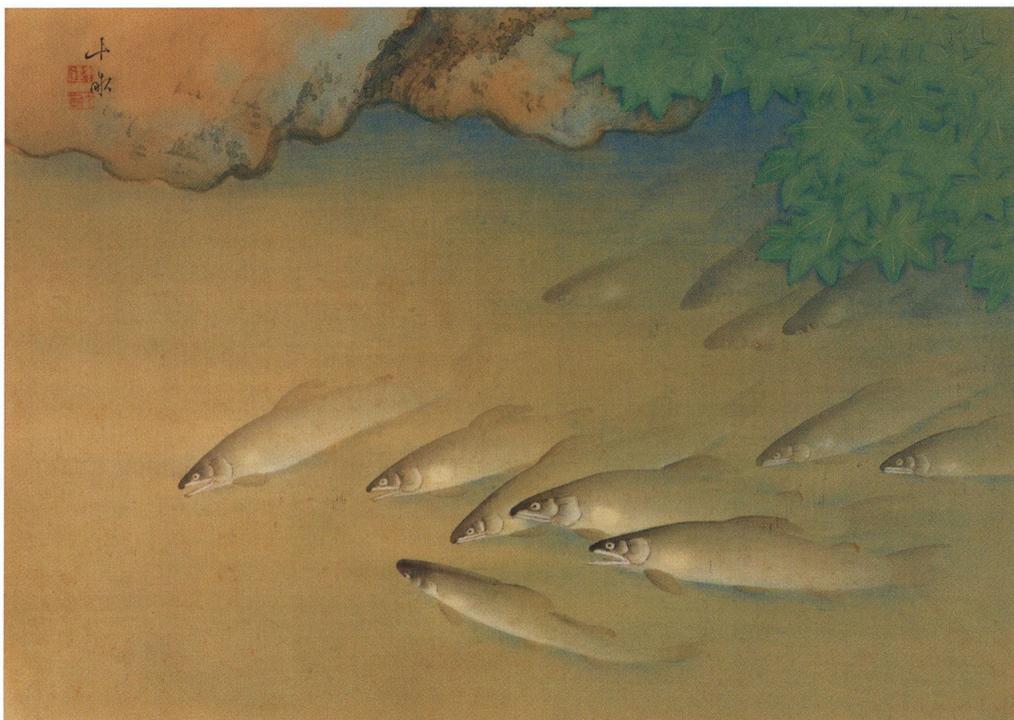
⑩ 荒井寛方 日出る時



⑧ 木島桜谷 裾野



⑨ 近藤浩一路 獅子舞



⑪ 荒木十畝 香魚



⑬ 木村武山 鴛鴦

⑫ 榊原紫峰 白梅双鳩



⑮ 吉川霊華 梅薫る夕



⑭ 北野恒富 白鷹



⑮ 水田竹圃 松林高士



⑯ 菊池契月 牡丹



⑰ 水上泰生 秋色

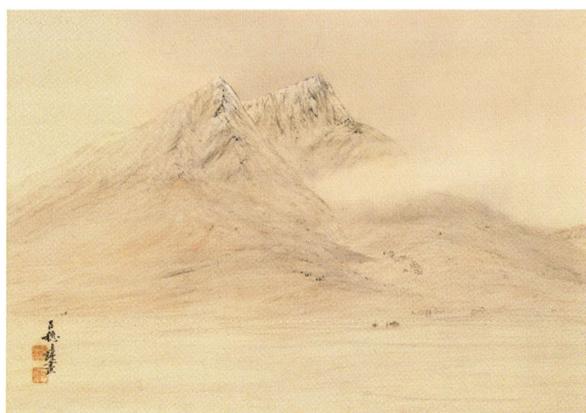


⑱ 下村観山 寿星

⑳ 真道黎明 雪山暮色



② 飛田周山 僊山樓觀圖



④ 平福百穂 双峰瑞雪



② 平井模仙 耕作

③ 平田松堂 燕子花

恭惟  
 皇太子殿下虔遵  
 睿訓恪率宏規既得  
 好速叶鳳凰和鳴之吉茲行慶典定琴瑟友樂  
 之祥  
 先倡後隨崇  
 二尊伉儷之道既仁且孝固  
 一系聯緜之基祝  
 皇統之無疆頌  
 天顏之有喜朝野遠近莫不謳歌我東京府居  
 九重之下為首善之區蒙  
 化尤深霑  
 恩殊厚幸逢  
 盛典喜倍恒情乃定府議選畫人七十三家各作  
 一幅裝為三冊名瑞彩帖謹以  
 上進方雲烟獻彩之時快揮綵筆寫草木呈祥  
 之象敬展葵誠 勝夫際會  
 昌期承乏知事因陳衆志恭書冊尾  
 大正十三年一月二十六日  
 東京府知事 宇佐美勝夫

⑤ 宇佐美勝夫 跋文 奉獻辭

# 瑞彩について——大正期を代表する画帖の名品——

大正十三年（一九二四）に皇太子の御成婚を祝って東京府から献上された「瑞彩」(作品番号8)は、東西両画壇の総勢七十二名の画家が筆を寄せており、当時「空前の画帖」(読売新聞)大正十二年七月十二日と謳われたように、まさに大正期の日本画の粋を結集した大作である。また描かれた各図はもちろんのこと、東京美術学校(以下、美校と略す)に依頼した画帖の装丁やこの三帖を納める収納箱にも優れた技術がそそがれている(図1、2)。このようにあらゆる面で当時の技術を集めた大変意義深い本画帖について、ここで詳しく制作経緯を追いつながら、その魅力を紹介したい。

## 1、前例としての英国皇太子献上画帖

大正期は、大礼、立太子礼、皇太子成年式、皇太子御成婚、大正天皇銀婚式など、皇室の御慶事が相次ぎ、各自治体を中心に数多くの奉祝品が献上された時期である。東京府も、大正四年の大礼では東京府工芸学校(現在の東京都立工芸高等学校)の制作による書棚を、大正六年には立太子礼を祝って府全域の大型模型を献上している。そして皇太子御成婚を祝っての「瑞彩」の献上へと続くのであるが、これは府知事が大正十年に阿部浩から宇佐美勝夫に変わって初めての献上であった。宇佐美は、自身も漢籍の素養があり、書画や詩歌もよくし、文化事業への理解も深かった(註1)。大正十一年には前知事の発案ながらほぼ頓挫寸前となっていた平和博覧会を開催し、同十五年には東京の美術家

たちの悲願であった東京府美術館(現在の東京都美術館)を設立するなどした。

そうした宇佐美の肝いりで「瑞彩」の制作も計画されたのだが、実は本画帖の献上計画が持ち上がる前年に、東京府は美校に別の画帖の制作を依頼している。ここで「瑞彩」の前段階とも言つべきこの画帖について少し触れておきたい。

宇佐美が府知事に就任した翌年の大正十一年、前年の皇太子(昭和天皇)ヨーロッパ諸国御訪問の答礼として、英国のエドワード皇太子(後の国王エドワード八世、退位後インザー公爵)が来日した。四月十二日から五月九日までの滞在で全国各地をまわったが、特に東京では手厚い接伴がなされた。

そして東京府では、これを記念して皇太子への画帖の贈呈を計画した(註2)。その画帖は、大正十一年 英国皇太子殿下献上品関係書類(東京都公文書館所蔵)によると、実に一万五千円の予算を計上して制作され、日本画家三十六名による絵が上下二冊



(図1) 画帖と収納箱(箱の法量：奥行48.5×幅59.2×高65.5cm)

にまとめられたものであった。画帖は、英国皇太子が巡遊する各地の名勝を描いた、まさに記念アルバム的な性格の作品であり、吉川靈華の「宮城」二重橋から始まり、鍋木清方「宮城桜田門」、前田青邨「赤坂離宮後苑ノ一隅」、小室翠雲「浜離宮」と続き、日光や京都、奈良、広島などの景勝地を経て、山内多聞「島津侯爵磯邸より鹿児島湾を望む」で幕を閉じる。「東瀛芳躰」と題されたこの画帖は、美校に装丁が一任され、画帖や収納箱の図案を島田佳矣、表紙裂を初代龍村平蔵、表紙の飾り金具を海野清、収納箱の内箱の時絵螺鈿を六角紫水、内箱の木地と外箱を齋藤富卜、そして画帖の装潢を篠卯之助が手がけたことが、記録から判明する。

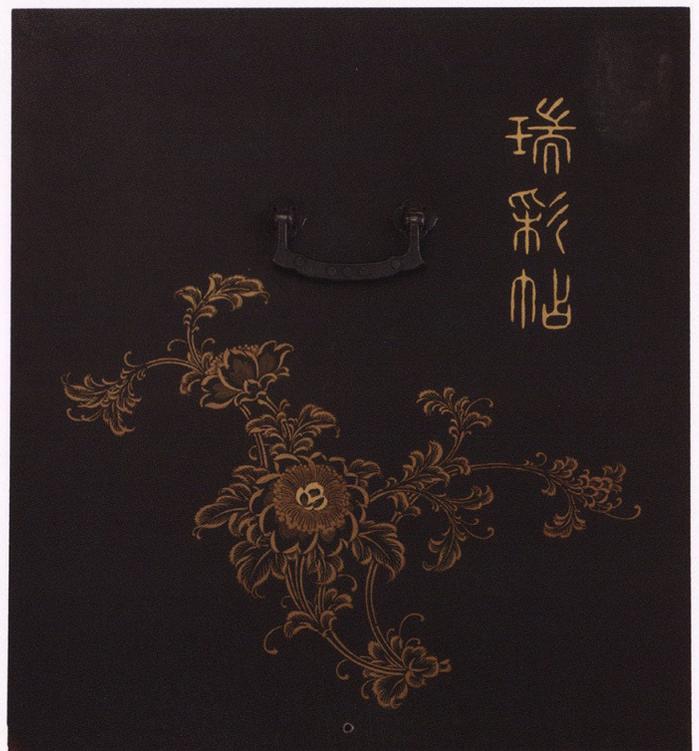
在京最終日に平和博覧会に台臨したエドワード皇太子へ、宇佐美府知事からこの画帖が贈られた。画帖に納められた奉呈辞の中で、宇佐美は皇太子の来日に対する府民の感激の大きさを述べ、「我力国文物未タ備ラス以テ飲ヲ邀フルニ足ル者ナシ惟山水八頗ル明媚ノ勝多ク丹青モ亦特異ノ譽ヲ得タリ乃チ画人三十六家ニ囑シテ各々名勝一幅ヲ写サシメ装潢シテ冊ト為シ謹ミテ台覽ニ供ス」と記している。この言葉からは、東京府の代表者としての立場にとどまらず、日本という国の美しさや美術の素晴らしさを伝えたいという宇佐美の確かな意志がうかがえる。画帖を受け取ったエドワード皇太子は、初めて日本を訪問した記念として大事にしたいと府知事へ伝えた。ちなみに、東京府は記念として三百部あまりの本画帖の記念図録を制作しており、画帖の内容はそれによって知ることができる。

## 2、計画から完成まで

東京府から「東瀛芳躰」が英国皇太子へ献上されたその翌年大正十二年の十一月には、皇太子裕仁親王と久

邇宮良子女王の御成婚が予定された。この御慶事を前に、再び東京府では画帖の献上計画が持ち上がった。「大正十三年 献上画帖一件書類」（東京都公文書館蔵）によると、六月二十九日には東京府の臨時府会で皇太子殿下御婚儀奉祝費として予算三万五千円が計上されている。その翌日の『朝日新聞』では早速この計画が報じられるのだが、それによると、英国皇太子殿下御来朝の時に贈呈した画帖に倣いながら、さらに大きなものを謹製することが決定したとある。そして、宇佐美は正木直彦美学校校長の他、川合玉堂、小堀鞆音、横山大観、下村観山と協議し、当代知名の画家六、七十名を選んで三冊位に分けた画帖を制作しようとして、それぞれ交渉を開始したと報じられている。

そして「東瀛芳躰」の時と同様、今回の画帖においても、その装丁や収納箱の制作は美校に依嘱され、七月十日には美校より東京府へ画帖および収納箱の制作費の見積が提出されている。画家も前回同様、東西画壇から実力者を選出することとなった。実際「瑞彩」を執筆した七十三名の画家を見ると、「東瀛芳躰」の執筆者三十六名の内、実に三十四名が再び制作に参加していることが分かる。残りの二名にしても、一人は大正十一年に没し、結果的に「東瀛芳躰」が絶筆となった田近竹邨であり、もう一人の結城素明は、文部省留学生として大正十二年から十四年にかけてパリに留学していたため、画帖制作には参加できない状況にあった。このように画帖制作の基本的な形はたしかに前年の



(図2) 収納箱蓋表

「東瀛芳躰」に倣っていることが分かるが、予算額も参加する画家の人数も前回の倍にしたところに、この画帖制作にかける宇佐美府知事の並々ならぬ意気込みが感じられる。

さて、本画帖に揮毫することになった七十三名の画家がどのように選出されたのか。当時の関連資料を見ていくと、画帖に計何名の画家を選出するかについては、かなり紆余曲折があったと考えられる。予算決定前から、府知事と正木、玉堂、鞆音、大観、観山が合持していたことはすでに述べた。玉堂、鞆音は帝展の重鎮であり、大観、観山は日本美術院の代表者である。

『大正十三年 献上画帖一件書類』には、美校が東京府に提出した執筆予定者名簿が綴られている。宇佐美

府知事の依頼を受けて、正木校長が提案したものと  
われるが、それによると、画帖は二帖仕立てで、各帖  
三十六名、計七十二名を選出している。画家は  
東西画壇から選出することとし、京阪二十五名、東京  
四十七名となっている。さらにその七十二名の内訳を  
見ると、帝国美術院会員六名、帝展審査員十一名、前  
審査員三名、推薦十八名、特薦八名、三等賞四名、自  
由選択八名、日本美術院同人十四名とある。ただし、  
ここで自由選択として名前の挙がった八名(山田介堂、  
島田墨仙、森村宣稱、菅橋彦、矢野橋村、広瀬東畝、山川永雅、  
小山栄達)は、結局この画帖執筆者に入っていない。そ  
の代わりに、日本美術院同人八名が加えられている。  
『日本美術院年報 大正十二年』によると、前例を踏襲  
しようとする府知事や正木、玉堂、鞆音に対し、大観  
親山が院同人全員の参加を訴えたこともあり、この意見を  
うけて自由選択の八名の代わりに、院同人二十二名が  
選ばれたのだろう(註3)。ただしこの時点では、まだ  
七十三名に一人足りない状況であることも付け加えて  
おきたい。

七月十一日、宇佐美府知事は執筆候補に挙げた内、  
東京方面在住画家四十七名を上野の精養軒に招待し  
た。出席したのは二十九名(代理出席一人含む)で、正木  
校長もこれに臨席した。ここで府知事は直接執筆を依  
頼し、欠席した画家にも書面で執筆を依頼した。関西  
方面の画家に対しては、京都市立美術工芸学校の校長  
代理をつとめた荒木矩に取りまどめを任せ、あらため  
て府知事より執筆依頼書が送られた。その書面には「大  
正の名筆を後世に伝へ度微衷に有之候」という想いが  
書き記されている。また揮毫者たちには「仏画を除く  
外全く各画家の自由な得意なもの」が任せられ、画帖は  
八月一杯の完成を予定し、二帖もしくは三帖にするこ  
と報じられている(註4)。

しかしこの後、関東を未曾有の大地震が襲つ。九月

一日に発生した関東大震災は、火災などによって都市  
部に大きな被害をもたらし、予定されていた御成婚記  
念事業の多くが変更または中止とされ、両殿下のご婚  
儀のご挙行も延期となった。そうした状況下で画帖の  
制作についても続行の有無が検討されたが、もともと  
八月中の完成を目指して、ある程度まで制作もすん  
でいたため、実行が継続されたという。

ただし、震災の影響もあってやはり各自の制作にも  
遅れが出ていたのか、年末になっても画帖はまだ完成  
を見なかった。『読売新聞』十二月二十一日の記事には、  
七十二名、二十四枚を一冊にして三冊に上梓されるは  
ず。一月中旬頃に完成する予定とある。この時点でも、  
依然として執筆者が七十二名として伝えられている。

東京府の執筆者名簿をみると、七十二名の画家名が  
列記してある中で、石崎光瑠の名が消され、その上  
に川村曼舟と上書きされている。そして名簿の最後  
に、後から書き足された形で再び石崎光瑠の名が記さ  
れている。この事情を推察すると、大正十二年七月に  
七十二名の画家の一人として、前年に帝展審査員に任  
命された光瑠が選出されたが、光瑠は同十一年の内に  
審査員を辞し、十一月から欧州への長期外遊に出てい  
た(註5)。そのため、光瑠が候補から外され、代わり  
に同じく京都の画家で帝展審査員を務める川村曼舟が  
加えられた。こうして制作が進められたが、九月に起  
きた関東大震災によって制作に大幅な遅れが発生し、  
そのことで前月に帰国した光瑠も画帖制作への参加が  
間に合うこととなり、急遽執筆者に加えられたのでは  
ないだろうか。

こうした京都側の画家の調整に関わった人物として、  
先程触れた荒木矩とともに画壇の重鎮であった富岡鉄  
斎が考えられる。十二月二十五日に揮毫画家七十二名  
に謝礼として各二百円が支払われているが、これと共  
に荒木に対して東京府より「京都方面揮毫取纏」という  
名目で謝礼金が支払われている。また、鉄斎に対して

も翌年一月二十四日にあらためて謝礼が支払われてい  
るところをみると、この二人が、協力者として関西方  
面の画家の仲介役となり、光瑠と曼舟の変更、追加の  
調整にも関わったものと考えられるのである。

このような紆余曲折を経て、七十三名の画家によ  
る図が出揃ったのは、大正十三年一月中旬のことであ  
った。

### 3、美校による画帖と収納箱の装丁

本画帖の魅力は、画家の豪華な顔ぶれだけではない。  
次に美校が手がけた画帖の装丁と収納箱について紹介  
したい。

美校が東京府に提出した説明書(大正十三年 献上画  
帖一件書類)を参考に、まずは画帖の方から詳しく見て  
いこう。表紙の裂地(図3)は、初代龍村平蔵によるも  
ので「古代紫地向ヒ鳳凰小丸紋ノ金襴」である。これは  
「二人静」と呼ばれる名物裂を模したもので、皇室の御  
慶事にふさわしく伝統と格式を意識したものである。

そして四隅を飾るのが、深瀬嘉臣による瑞花瑞鳥を  
彫り込んだ銀製金具である。画帖三帖の表表紙と裏表  
紙、計六面の四隅に付けられた金具は、瑞鳥の姿態が  
少しずつ変化がつくよう工夫されている。また説明書  
には「古雅莊重ノ趣ヲ現セントシテ殊更ニ大手大味ノ  
彫口ヲ撰ミタリ」とあり、彫りの表情で古様を表そう  
としていたことが分かる。そして表紙中央を飾る銀製の  
題箋も、深瀬嘉臣の鏤刻したものである。題箋には  
「瑞彩」の二文字が刻まれるが、文字は尾上柴舟の筆に  
より上代和様の真行草体がそれぞれ画帖上中下に使  
分けられている(図4)。

画帖の装潢を手がけたのは経師篠卯之助、画帖全体  
の意匠図案を考案したのが渡辺香涯であった。香涯は

表紙裏の見返しの装飾も自ら担当し、「古様ノ風趣ヲ寫サントシテ」金銀の切箔、野毛、砂子を散らした「頁の図版・解説扉参照」。正木校長もこの出来には感心し、「切箔は藤原時代の如き細きものは現今何人もなし得ざる所とせしか近時田中親美氏工夫して細き切箔を造り何人も及ぶものなかりしに渡辺氏工夫して田中氏よりも細く長きものを造り得ることとなりたり。今一段の工夫を積まば藤原時代の如き載金彩色を成就し得へんか」(註の「記」)と云ふ。

続いて、この画帖三帖を収める箱の装丁であるが、こちらも全体の図案を担当したのは、渡辺香涯であった。収納箱は直に書架として使えるように考案したといい、また三段棚の棚板は取り外せて、それぞれ書盆台も兼ねる作りとなっている。木地は前田文六、髹漆は松波多吉が担当し、箱の外側は木地の上に麻布三枚を貼り、さらに摺漆を十三回塗り重ね、いまだかつてないほど堅牢な出来となったという。

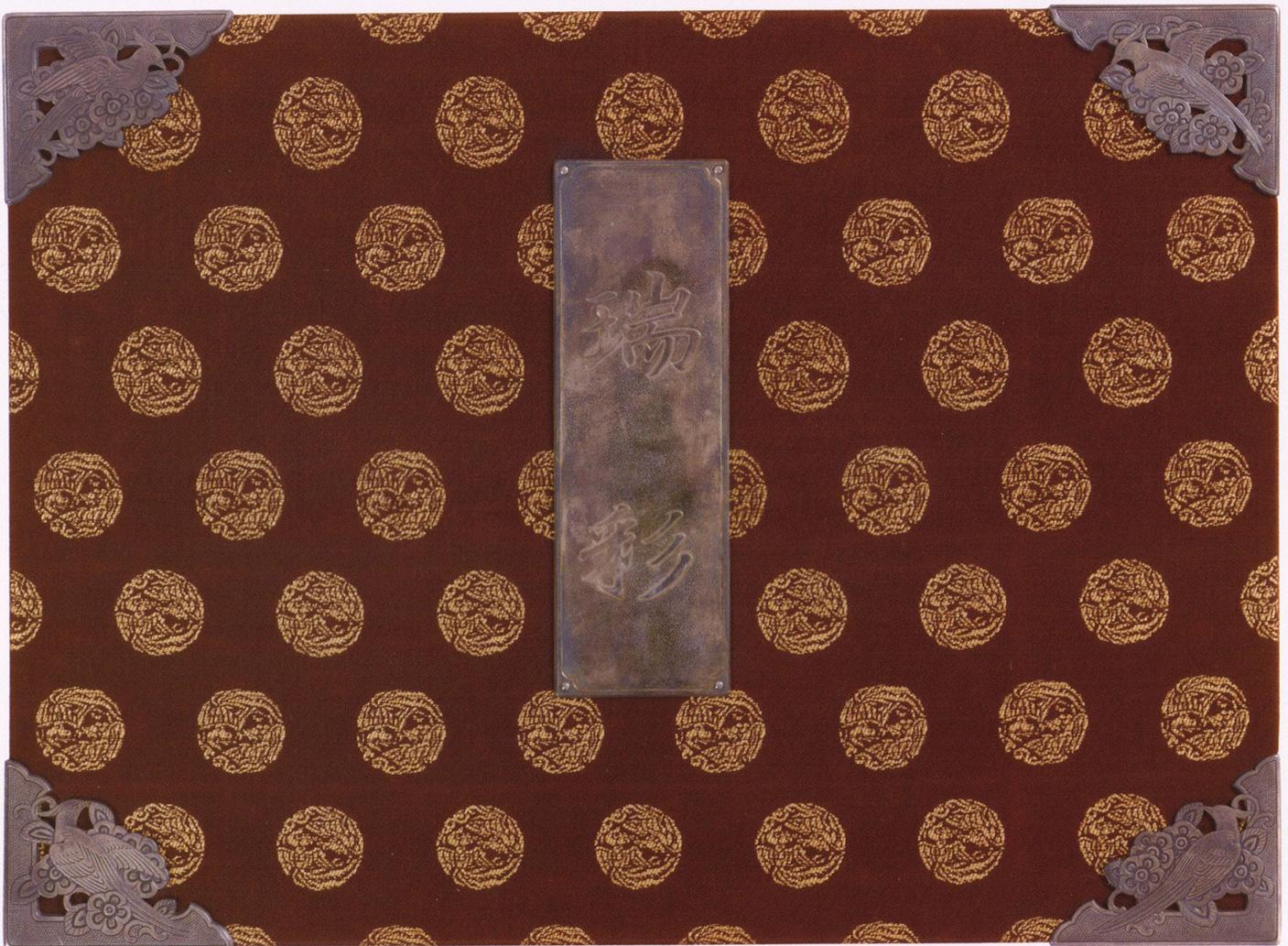
そして時絵を担当したのが松田権六である。乾漆石目塗の上に描金で瑞花文様を箱の側面と正面の蓋にあしらひ、また正面の蓋には「瑞彩帖」の三文字を金平脱で施している(図3)。石目塗とは、漆の表面に乾漆粉



下冊



中冊 (図4) 題箋



(図3) 上冊表紙

(または炭粉)を蒔いて石の肌のような独特の質感を表す技法のことで、この凹凸のある石目地の上に時絵を施すのは非常に難易度が高く、特に薄い金属板を貼り付ける平脱の技法で文字を布置するのは困難を極めたという。箱の縁には、香阪宗廣の手による斜子菊花鋳打の銀製金具が取り付けられた。

以上見てきた通り、画帖、収納箱の装丁に一貫しているのが、皇室への献上にふさわしい格式を重んじての、伝統性や古様への強い意識である。図案を担当した渡辺香涯は「画冊容器相俟ツテ温雅ニシテ典麗ナル風格ヲ具ヘシメンコトヲ期シ」と語っている。

こうした画帖の装丁に関して、美校側は依頼を受けてすぐに制作に取りかかったというが、九月には関東大震災が発生し、またすでに触れた通り、画帖が二冊仕立てか三冊かなかなか決定しなかったため、結局約八ヶ月の期間を経て一月二十日ようやく画帖および収納箱を完成するにいった。二十二日に美校生徒への内覧が行われ、翌二十三日に、東京府商工奨励館講堂において関係者を招いた内覧会が開かれた。

また、この依頼製作に関する責任者の正木校長は、画帖完成を受けて自ら目録をしたためた。美校に対してはその後、引き続き画帖の記念図録の制作が東京府から依頼され、正木に対しては、「献上画帖揮毫幹旋ならびに画帖及び容器製作を委嘱し完成したるに由る。写真帖(記念図録を指す)調整に関する謝礼を含む」として謝礼が支払われた。

## おわりに

ここまで見て分かった通り、本画帖は他に例がないほど、多くの画家および工芸家が関与し完成させた、

近代の画帖中最大の力作といっても過言ではないだろう。あらためて本画帖の各図を見ていくと、帝展、院展、京都画壇とそれぞれの画家が筆を寄せているが、画題は自由にするとして宇佐美府知事らの意図通り、非常に多彩な画題の絵が繰り広げられる。速水御舟「生果」(上冊第九図)、川端龍子「御盃」(上冊第十九図)などの静物画や、中村大三郎「薰香」(中冊第十二図)、上村松園「雛祭」(中冊第十四図)などの美人画など、吉祥的な画題に限定することなく、画家ひとりひとりが自由に筆を揮った様子が見受けられるのである。「大正期の名筆」を残したいという府知事の強い想いを受けて、各画家はおおよそ三〇センチ×四〇センチの本紙に、めいめいの美意識を精一杯に表現したのである。

そして画帖の各図はもちろんのこと、その装丁や収納箱にいたるまで、当時の技術の粋が集められたところには、画帖を画面だけでなく、装丁を含めた総合的な美術作品としてとらえる意識をつかがうことができるのである。

### (補定)

本画帖は一冊の厚みが相当あり、開閉時に負担のかかる番部分には顕著な傷みが生じていた。また本紙にも経年の汚れやシミが見られたため、平成十四年度から十六年度にかけて修理を行った。本紙を台紙から分離し汚損を除去した後、新たな台紙に貼り込み、作品の今後の取り扱いと保存管理を考慮して、一葉ずつの形状に変更した。これによって、各図は負担なく一葉ずつを並べて展示することが可能となった。また旧表装の画帖の形態は旧台紙をそのままの形で残して当初の姿を留めることとした。本展覧会は、修理後あらためて本画帖の全貌を紹介する初めての機会となる。

(註1) 『宇佐美勝夫氏追悼録』故宇佐美勝夫氏記念会、昭和十八年

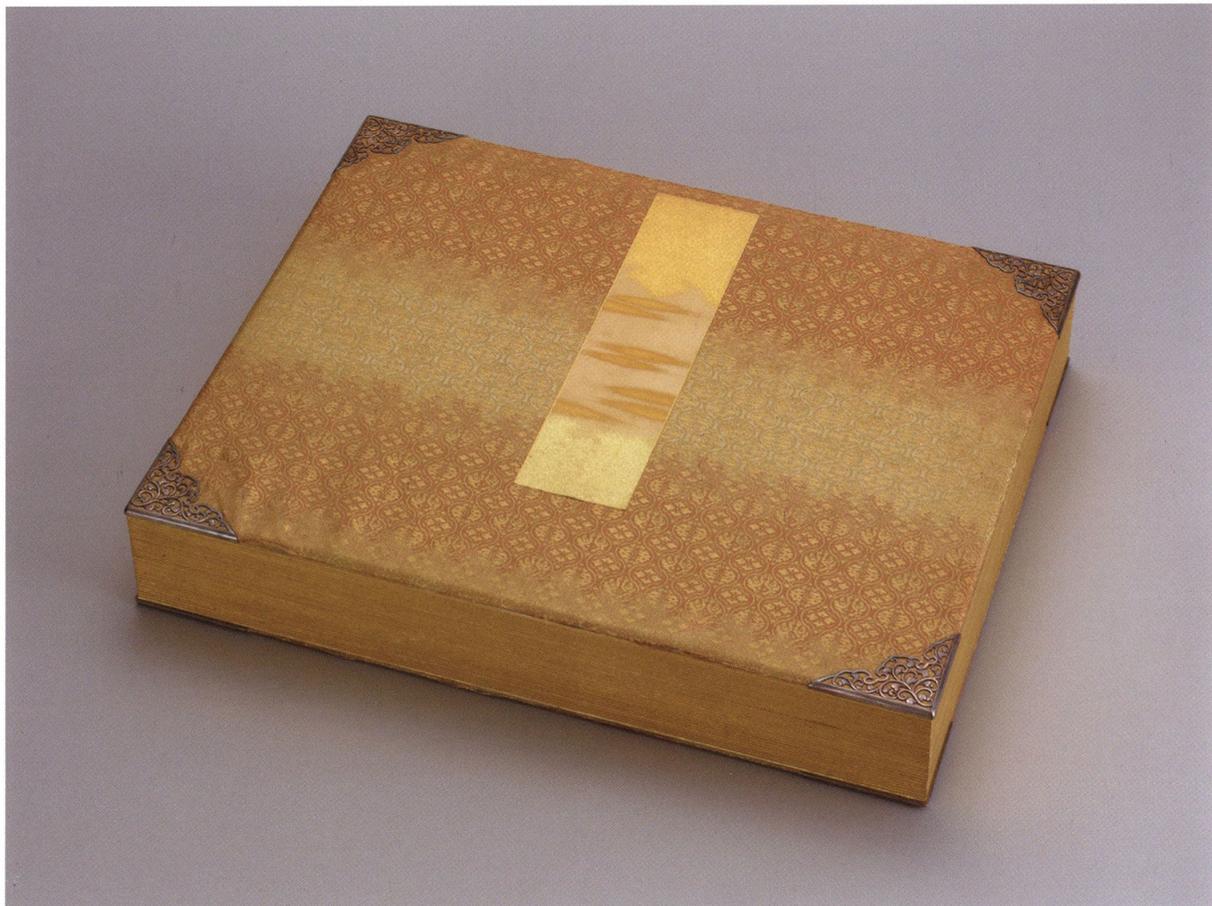
(註2) ちなみに海外からの賓客に対し、東京府から記念品を贈呈した例としては、大正七年に来日したコンノート公(英国)へ贈った海野美盛の彫刻による精工社製金時計などがある。

(註3) 皇太子御成婚に際しては、日本美術院でも奉祝のため画帖の制作、献上の話が持ち上がったが、「瑞彩」へ美術院の同人全員が参加することとなったため、この計画は取り止めたという(『日本美術院年報 大正十二年』日本美術院、大正十三年二月)。

(註4) 『美術之日本』十五巻七号、大正十二年七月

(註5) 三野亮「大正の画家石崎光瑠」望月印刷、平成五年

(註6) 『十三松堂日記 第一巻』中央公論美術出版、昭和四十年



## 9 秋田名勝画帖

一帖

平福百穂筆

昭和三年（一九一八）

紙本着色

本紙各三三・六×四四・二

総四二・八×五三・四×九・三

大礼奉祝の為、昭和三年に秋田市より献上された画帖。画帖の揮毫を依頼されたのは、秋田県角館出身の画家平福百穂（一八七七～一九三三）であった。表紙の裂は、中央に向かって濃い紅から白へと段染めされた地に、鳥・蝶文と菱花文を立涌の中に交互に表した可憐な文様である。その上に金沙子による霞模様为题箋と唐草文様の飾り金具が付されている。画帖には目錄が付属し、「献上／一 秋田名勝画帖 拾二圖 壹冊／秋田縣人平福貞蔵 號百穂謹畫／以上／昭和三年十二月吉日／秋田縣秋田市長勲四等井上廣居」としたためられている。

制作を依頼された百穂は、秋田に赴き各地を写生をしてまわり、秋田の名所旧跡十二景を一冊の画帖にまとめた。その全十二図の絵には、春から秋にかけて移り変わってゆく秋田の雄大な自然とそこに生きる人々の営みが、昭和期以降の百穂の作品に特徴的な墨のにじみと擦れをいかした筆遣いで表現されており、故郷に対する百穂の暖かなまなざしが感じられる。

第一図「千秋公園と太平山」は、前景の桜にはごく淡いピンク色を施し、その奥の池と遠景の太平山は青く、池を泳ぐ鯉の赤色が華やかさを加えている。すべて控えめながら、春の柔らかな光の中に浮かぶ風景が見事に表現されている。第五図「男鹿半島」は、荒れる波の描線を細筆で描き、その向こうに見える男鹿半島は淡墨をにじませた上に擦れた筆を重ね、激しい波の浸食で出来上がった奇岩の迫力ある姿を表す。第六図「奈曾の白滝」しづきをあげて落ちる滝は白く、その下は深い藍色に沈む。他の図に比べても彩色が豊かで、夏の強い日差しに浮かび上がる鮮やかな木々の緑が表現されている。第十二図「平鹿の美田」は、稲を収穫する農夫が描かれ、前景にはその稲が干され、後景には鳥海山がそびえる。人々の営みと自然の雄大さが混ざり合う、秋田の魅力の風景が描き出されている。

また、詳しい刊行年は不明であるが、百穂没後に『百穂遺芳（秋田十二景）』と題した本画帖の記念図録が発行された。



① 千秋公園と太平山



⑤ 男鹿半島



⑥ 奈曾の白滝



⑫ 平鹿の美田



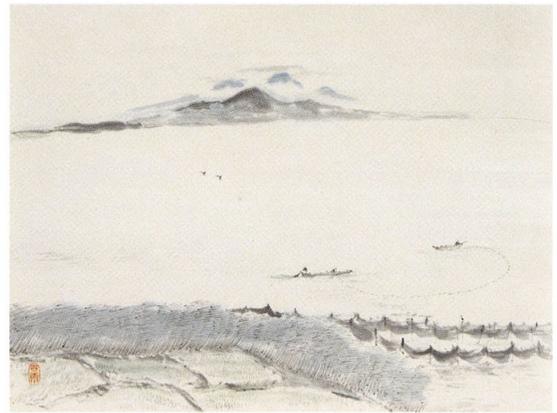
③ 旧雄物川河口



② 仁別の美林



⑦ 象潟



④ 八郎潟



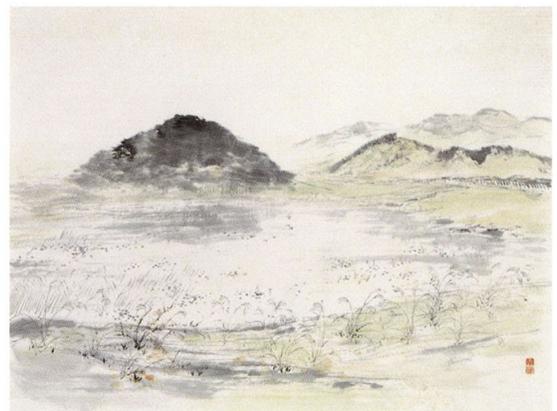
⑨ 十和田湖



⑧ 溪后坂



⑪ 田沢湖



⑩ 後三年



## 10 彩雲

一帖

奥村土牛ほか二十八名の合作  
昭和五十六年（一九八一）

紙本着色

本紙各二六・七〇・三〇・〇×三四・五〇三七・九

総三三・〇×四一・〇×一〇・五

昭和天皇の満八十歳（傘寿）を祝って、昭和五十六年の秋に日本美術院から献上された画帖。表紙は縹地花卉文金襴の裂に、同院理事長の奥村土牛の筆による「彩雲」の題箋が貼られる。画帖は、やはり土牛による題字から始まり、二十八名の院同人画家の絵が続く。最後の奥書も土牛により「奉祝 八十御賀 昭和五十六年秋 財団法人日本美術院 代表奥村義三」と記されている。

昭和の日本画壇の巨匠たちの絵が並ぶ本画帖は、各画家の個性が存分に発揮され、頁をめぐるごとに全く異なる表情を見せる。揮毫した画家のうち最高齢九十二歳であった奥村土牛（第二図）は、余白を大きめにとった画面の中に石榴をひとつ描いており、部分的に用いられた金泥は画面に華やかさよりも崇高さを与えている。また、片岡球子（第九図）は、六十歳を超えてから描き続けた富士を題材に選び、画面サイズを感じさせない原色使いの迫力ある富士図を描いている。

日本美術院は大正十一年の「景雲餘彩」（出品番号7）をはじめ、皇太子（今上陛下）御誕生を祝って昭和九年に「旭光帖」（当館蔵）を献上した。また昭和期後半には本画帖の他にも昭和天皇御在位六十年を祝う「光彩」（当館蔵）と題した画帖を献上し、同院からの画帖の献上は平成の御代にまで続いている。

③ 奥村土牛

⑬ 菊川多賀

⑳ 守屋多々志

⑥ 中村貞以

② 富取風堂

⑪ 岩橋英遠

⑩ 片岡球子

⑬ 真野満

⑫ 羽石光志

⑱ 塩出英雄

⑳ 平山郁夫

㉔ 下田義寛

㉓ 奥村土牛 奥書

「彩雲」作者一覽

- ① 奥村土牛(題字)
- ② 富取風堂
- ③ 奥村土牛
- ④ 小倉遊亀
- ⑤ 田中青坪
- ⑥ 中村貞以
- ⑦ 北沢映月
- ⑧ 小松均
- ⑨ 中島清之
- ⑩ 片岡球子
- ⑪ 岩橋英遠
- ⑫ 羽石光志
- ⑬ 真野満
- ⑭ 今野忠一
- ⑮ 福王寺法林
- ⑯ 郷倉和子
- ⑰ 樋笠数慶
- ⑱ 塩出英雄
- ⑲ 菊川多賀
- ⑳ 平山郁夫
- ㉑ 莊司福
- ㉒ 吉田善彦
- ㉓ 岡本弥寿子
- ㉔ 森田曠平
- ㉕ 松尾敏雄
- ㉖ 後藤純男
- ㉗ 守屋多々志
- ㉘ 下田義寛
- ㉙ 小山硬
- ㉚ 奥村土牛(奥書)

# 出品目録

平成二十三年七月二十三日(土)～九月十一日(日)  
 前期・七月二十三日(土)～八月十四日(日)  
 後期・八月十六日(火)～九月十一日(日)



作品番号	作品名	揮毫者	制作年	員数	材質技法	法量	展示期間
1	画帖	瀧和亭ほか四十八名の合作	明治十八、十九年 (二八八五、八六)	一帖	絹本着色	本紙各三二・二×四一・六 総四一・三×五一・〇×六・五	全期
2	青年画帖	池田真哉ほか十九名の合作、 上奏文・村田直景・関口隆正	明治二十七年 (二八九四)	一帖	絹本着色	本紙各三五・二×三七・二×三二・七 総四七・八×四二・〇×九・八	全期
3	慶雲帖	山名貫義ほか六十名の合作、 〔上〕題字・伊藤圭介、序文・高田竹山 〔下〕題字・小野湖山、序文・高林五峰	明治三十三年 (二九〇〇)	二帖	絹本着色	本紙各三九・二×三二・八 総各四二・五×三四・九×九・九	後期
4	画帖	杉谷雪樵	明治二十四年 (二八九一)	一帖 (二帖のうち)	絹本着色	本紙各四〇・九×五〇・六 総四七・八×五七・五×一・〇	後期
5	日本美術協会画帖	川端玉章ほか十二名の合作	明治三十三年 (二九〇〇)	一帖 (二帖のうち)	絹本着色	本紙各三一・八×四一・二 総三九・三×四八・四×八・四	前期
6	京都市画帖	鈴木松年ほか三十六名の合作	大正四年 (二九一五)	二帖	絹本着色	本紙各三一・五×四一・四 総各四〇・九×五〇・二×一〇・七	全期
7	景雲餘彩	横山大観ほか二十二名の合作	大正十一年 (二九二二)	一帖	絹本着色	本紙各三一・〇×三九・〇 総三六・一×四三・一×一一・〇	全期
8	瑞彩	富岡鉄斎ほか七十三名の合作、 題字・松方正義、跋文・宇佐美勝夫	大正十三年 (二九二四)	三帖	絹本着色	本紙各二八・二×四〇・六 総各三四・七×四七・三×一四・五	全期
9	秋田名勝画帖	平福百穂	昭和三年 (一九二八)	一帖	紙本着色	本紙各三三・六×四四・二 総四二・八×五三・四×九・三	前期
10	彩雲	奥村土牛ほか二十八名の合作	昭和五十六年 (一九八一)	一帖	紙本着色	本紙各二六・七×三〇・〇×三四・五 ×三七・九 総三三・〇×四一・〇×一〇・五	全期

# List of Exhibits

- 1  
Picture album  
Taki Katei and 47 artists  
1885-86  
color on silk  
each painting 32.1 × 41.6  
album 41.3 × 51.0 × 6.5
- 2  
Picture album of Seinen Kaiga Kyokai  
Ikeda Shinsai and 18 artists, Murata Chokkei,  
Sekiguchi Takamasa (foreword)  
1894  
color on silk  
each painting 35.2~37.2 × 32.7  
album 47.8 × 42.0 × 9.8
- 3  
Picture albums named “*Keiunjo*  
(Auspicious Clouds)”  
Yamana Tsurayoshi and 59 artists, Ito Keisuke  
(epigraph), Takada Chikuzan (foreword),  
Ono Kozan (epigraph), Takabayashi Goho  
(foreword)  
1900  
2 albums  
color on silk  
each painting 39.2 × 31.8  
each album 42.5 × 34.9 × 9.9
- 4  
Picture album  
Sugitani Sessho  
1891  
one of 2 albums  
color on silk  
each painting 40.9 × 50.6  
album 47.8 × 57.5 × 11.0
- 5  
Picture album of Nihon Bijutsu Kyokai  
Kawabata Gyokusho and 11 artists  
1900  
one of 2 albums  
color on silk  
each painting 31.8 × 41.2  
album 39.3 × 48.4 × 8.4
- 6  
Picture albums of Kyoto city  
Suzuki Shonen and 35 artists  
1915  
2 albums  
color on silk  
each painting 32.5 × 41.4  
each album 40.9 × 50.2 × 10.7
- 7  
Picture album named “*Keiunyasai*  
(Felicitous Clouds and Other Sketches of  
Life)”  
Yokoyama Taikan and 21 artists  
1922  
color on silk  
each painting 32.0×39.0  
album 36.1 × 43.1 × 12.0
- 8  
Picture albums named “*Zuisai* (Fresh  
Colors)”  
Tomioka Tessai and 72 artists, Matsukata  
Masayoshi (epigraph), Usami Katsuo  
(afterword)  
1924  
3 albums  
color on silk  
each painting 28.2 × 40.6  
each album 34.7 × 47.3 × 14.5
- 9  
Picture album of famous places in Akita  
Hirafuku Hyakusui  
1928  
color on paper  
each painting 33.6 × 44.2  
album 42.8 × 53.4 × 9.3
- 10  
Picture album named “*Saiun* (Colorful  
Clouds)”  
Okumura Togyu and 27 artists  
1981  
color on paper  
each painting 26.7~30.0 × 34.5~37.9  
album 33.0 × 41.0 × 10.5

ひろげる、たのしむ、小粋な日本画——近代画帖の美  
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 55  
編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 横溝廣子  
発行 宮内庁  
平成二十三年七月二十三日発行  
© 2011, The Museum of the Imperial Collections

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

ひろげる、たのしむ、小粋な日本画——近代画帖の美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 55

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十三年七月二十三日発行

© 2011, The Museum of the Imperial Collections

## Foreword

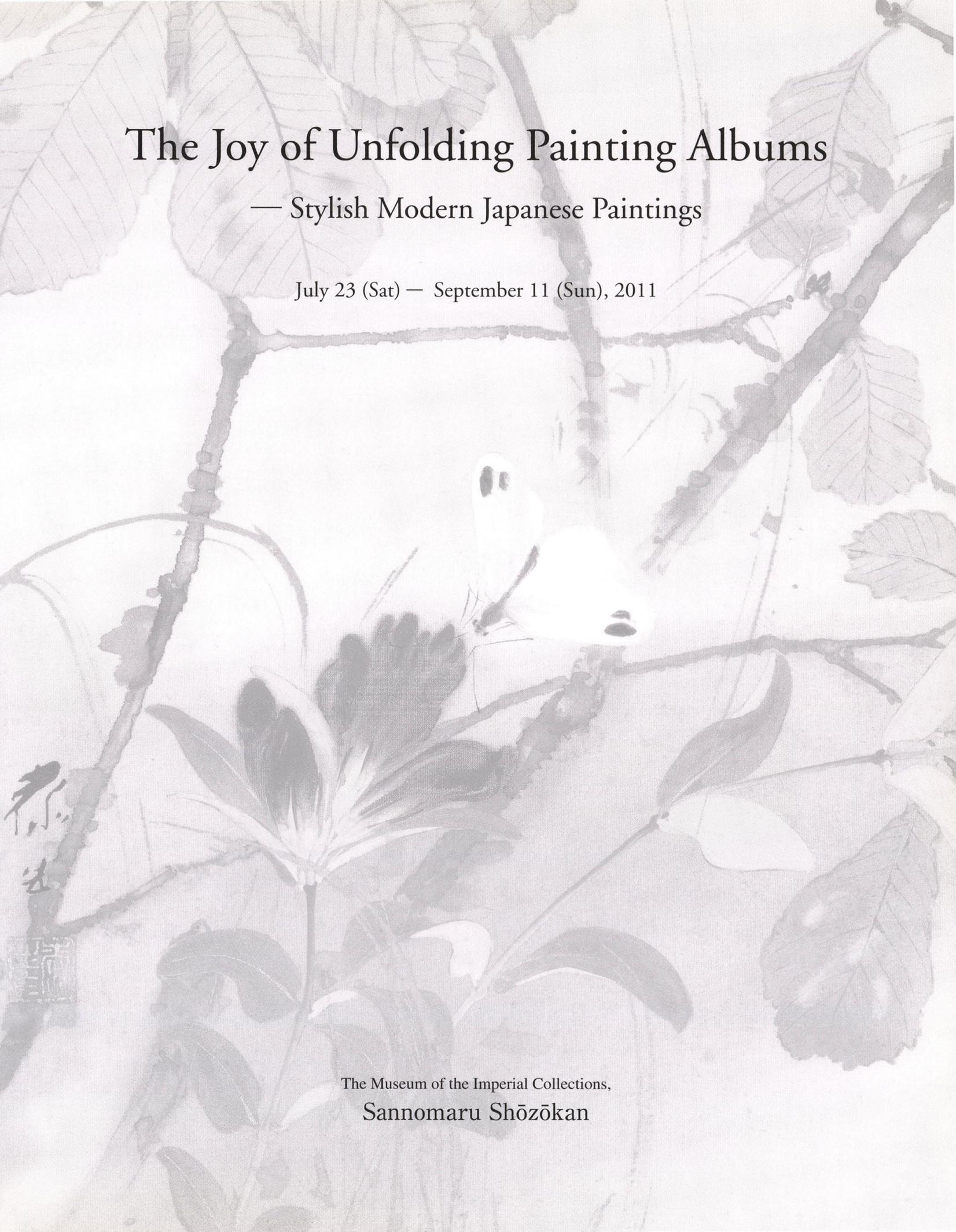
Painting albums are a style of paintings where several paintings by one or various painters are mounted on sheets forming an accordion book. In ancient times, paintings imported from China, due to influence of the Ming Dynasty, or paintings depicting The Tale of Genji, were collected and mounted in beautifully bound albums, not only for appreciation, but also to act as furnishings. Furthermore, in the latter half of the Edo period, along with relationships between painters and people of culture, the contents of painting albums widened and became quite popular.

Since the Meiji Period, painting albums were popular as gifts because they enabled a collection of various paintings in convenient size, and therefore, many were created to celebrate various auspicious events and festivals. However, during the Taisho to Showa periods, these painting albums gradually ceased to be created. Nevertheless, many albums were presented as gifts to the Imperial Court on auspicious occasions, from various art groups and local governments. Therefore, our museum collection contains many painting albums of the modern era, and this is one of the features of our modern Nihonga (Japanese Paintings) collection. Through these albums, not only can the viewer enjoy the luxurious co-starring works of the major painters representing the era, but they can also appreciate the stylish sense of these paintings due to their small size. Furthermore, the elaborate decorative metal fittings and beautiful cloth bindings are also noteworthy.

In this exhibition, we will introduce the charm of these painting albums, which please the viewers' eyes with their various pictures, while possessing elegance as furnishings. We hope it will be an opportunity to see the forms of painting albums that were created as gifts to the Imperial Court, since the modern era.

July, 2011

The Museum of the Imperial Collections,  
Sannomaru Shōzōkan



# The Joy of Unfolding Painting Albums

— Stylish Modern Japanese Paintings

July 23 (Sat) — September 11 (Sun), 2011

The Museum of the Imperial Collections,  
Sannomaru Shōzōkan